

# 寫真新世紀

New Cosmos of Photography

vol.22 2007



Canon

# 写真新世紀

## New Cosmos of Photography 2007 Vol. 22

### ご挨拶

キヤノンは、1991年に、写真表現の新たな可能性に挑戦する新人写真家を発掘・育成・支援することを目的に公募形式のコンテスト「写真新世紀」をスタートしました。今年で17年目を迎え、第30回目の公募となった今年のコンテストでは、1,277名の方々にご応募いただきました。30回の公募回数を数えるまでのコンテストに成長することができたのも、これまでにご応募くださった方々、写真展に足をお運びくださった方々、そして審査員の方々といった多くの皆様が様々なご立場から本コンテストをご支援くださった賜物であり、心より感謝の意を表する次第です。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

「写真新世紀」は、「写真で何ができるだろう。写真でしかできないことは何だろう」をテーマとして投げかけ、写真表現の新たな可能性を追求し続けてまいりました。昨今はインターネット下で個人レベルでも作品発表の場を容易に得ることができ、作品制作の現場で自己表現が広く活発になってきていることを感じます。このような状況において、今後も応募作品はますます多様化し、そして写真表現の新たな可能性がそこに存在しうることを強く確信しております。

キヤノンは、今後も「写真新世紀」を始め様々な活動を通じ、写真文化の発展に微力ながらも貢献していく所存です。これから先にもどのような新しい写真表現が世の多くの人たちに感動を与えてくれるのか、大きな期待とともに楽しみにしております。

キヤノン株式会社  
コーポレートコミュニケーションセンター  
所長 平澤 哲男

### 写真で何ができるだろう？

### 写真でしかできないことは何だろう？

「写真新世紀」は、写真表現の新たな可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的に1991年にスタートしたキヤノンの文化支援プロジェクトです。公募形式によるコンテストの実施を中心に、各地での受賞作品展の開催や作品集の制作、ウェブサイトでのニュース発信など、総合的な活動を行っています。作品サイズ、形式、点数、年齢、性別、国籍など、応募制限のないこのコンテストは、銀塩・デジタル写真をはじめ、現代アートや様々な映像メディアも取り入れた、自由で独創的な写真表現を応援しています。これまでにオノデラユキ氏や佐内 正史氏、蛭川 実花氏、澤田 知子氏など、国内外で広く活躍する優秀な写真家を多数輩出しています。

### 目次

#### 2007年度（第30回公募）

2	写真新世紀の歩み
4	優秀賞審査会報告
6	青山 裕企／優秀賞
10	黒澤 めぐみ／優秀賞
14	詫間 のり子／優秀賞
18	田福 敏史／優秀賞
22	中里 伸也／優秀賞
26	中島 大輔／優秀賞
30	優秀賞者コメント
32	佳作
37	審査員プロフィール

#### ゲスト審査員

38	榎本 了吉 インタビュー
44	具 本昌 インタビュー

#### ポートフォリオ&インタビュー

50	高木 こすえ／2006年度グランプリ
54	伊賀 美和子／1999年度優秀賞
58	澤田 知子／2000年度特別賞

62	写真新世紀ニュース
----	-----------

#### 〈表紙〉

写真作品：「laboratory1:」高木 こすえ（P.50参照）  
デザイン：峯崎 ノリテル

# 写真新世紀の歩み

写真表現の新たな可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的として「写真新世紀」がスタートしたのは1991年秋のこと。当初は年に4回行われていた公募が現在では一回に集約され、年間500人程だった応募者数は年を経るごとに増加し、現在では1000人を大きく上回るまでに成長しています。また、受賞作品を展示する「写真新世紀展」を日本各地で開催し、その年の受賞者や第一線で活躍する過去の受賞者によるトークショーも行ってきました。「写真新世紀」の歴史は、受賞者の方々のみならず、応募して下さる方々、そして「写真新世紀展」に足を運んで下さる多くの方々とともに刻まれてきたものであると言っても過言ではないでしょう。

写真展	1992 第1～4回公募	1993 第5～8回公募	1994 第9、10回公募	1995 第11、12回公募	1996 第13、14回公募	1997 第15、16回公募	1998 第17、18回公募
応募者数	483人	505人	703人	456人	587人	537人	771人
グランプリ	木下 伊織	市川 綾子	熊谷 聖司	HIROMIX	野口 里佳	矢島 慎一	柏 亜矢子
優秀賞	岩崎 昌弥 小川 嘉朗 奥谷 佳子 オノデラユキ 今 義典 清水 麻弥 辰本 まこと 千葉 鉄也 ノニータ(谷野 浩行) 野村 浩 山本 美奈	遠藤 年勇 大橋 仁 金城 民子 河野 安志 高橋 ジュンコ 土井 弘介 中山 英輔 西 光一 野村 浩 宮本 知保 茂木 綾子	大森 克己 小倉 英三郎 金子 亜矢子 白土 恭子 ジャン＝クロード・ベレグー リン・デルピエール	A・R・T Puff 坂本 浩 佐内 正史 柴原 三貴子 野沢 文子 パトリシア・ガバス 本田 かな	加藤 直司 菅野 純 黒瀬 英文 蜷川 実花 早船 ケン 吉田 優 ロス・バン・ホーン	伊藤 トオル ヴァレリー・プラン 慶 高城 典子 山本 香 山本 耕司	池田 宏彦 岩崎 マミ 黒瀬 康之 佐藤 純子 ヴェロニック・ジリア 藤原 江理奈 守田 衣利
ゲスト審査員			ロバート・フランク (写真家) 坂田 栄一郎 (写真家)	ジャン＝クロード・ルマニー (フランス国立図書館名誉コンセルバトゥール) 浅葉 克巳 (アートディレクター)	伊島 薫 (写真家) 椎名 誠 (作家)	カシン・リー (写真家) 森山 大道 (写真家)	ベルナルド・フォコン (写真家) ホンマタカシ (写真家)

## 【レギュラー審査員】

荒木 経惟 (写真家)  
飯沢 耕太郎 (写真評論家)  
南條 史生 (森美術館館長)  
森山 大道 (写真家 2002年～)  
(五十音順、敬称略)



仙台展でトークをする2006年度グランプリ高木 こそえ氏



福岡展でトークをする2006年度優秀賞清水 朝子氏 (福岡アジア美術館)



福岡展でトークをする2006年度優秀賞喜多村 みか氏+渡邊 有紀氏

1999 第19、20回公募	2000 第21、22回公募	2001 第23、24回公募	2002 第25回公募	2003 第26回公募	2004 第27回公募	2005 第28回公募	2006 第29回公募
759人	944人	881人	1,004人	1,150人	1,087人	1,324人	1,505人
安村 崇	中村 ハルコ		吉岡 佐和子	内原 恭彦	(準グランプリ) 川村 素代 滝口 浩史	小澤 亜希子	高木 こそえ
伊賀 美和子 遠藤 礼奈 岡部 桃 田邊 晴子 長尾 智子 矢ヶ崎 祐子 吉田 優	佐藤 篤 佐野 方美 澤田 知子 鈴木 良 谷口 正典 中村 年宏 山田 大輔	今井 紀彰 佐伯 慎亮 新沢 もも たけむら 千夏 中谷 理子 中西 博之 西郡 友典 吉岡 佐和子	岡本 英理 鍛冶谷 直記 SABA(高橋 宗正、中島 弘至) ヨシダ ミナコ 吉本 尚義	植本 一子 加藤 純平 藤田 裕美子 法福 兵吾 ヤマダ シュウヘイ	大庭 英亨 ふじい あゆみ 山下 豊	新垣 尚香 梶岡 禄仙 とくた はじめ 西野 壮平 林口 哲也+松村 康平	喜多村 みか+ 渡邊 有紀 清水 朝子 Palla 辺口 芳典 山田 いずみ
サラ・ムーン (写真家) 長野 重一 (写真家)	横尾 忠則 (画家) 倉石 伸乃 (評論家) ジル・モラ (アートディレクター)	木村 恒久 (グラフィックデザイナー) 都築 響一 (エディター)	マルク・リブー (写真家) 東松 照明 (写真家)	マーティン・パー (写真家) 鈴木 理策 (写真家)	ケビン・ウエステンバーグ (写真家) やなぎ みわ (美術作家)	ウィリアム・エグルストン (写真家) 蜷川 実花 (写真家)	日比野 克彦 (アーティスト) ボリス・ミハイロフ (写真家)

## 写真新世紀巡回展 2007より



仙台展 (せんだいメディアテーク)



仙台展会場風景



仙台展でトークをする2005年度グランプリ小澤 亜希子氏



仙台展でトークをする2006年度優秀賞山田 いずみ氏



大阪展でトークをする2006年度優秀賞辺口 芳典氏(OAPアートコート)



大阪展でトークをする2001年度優秀賞佐伯 慎亮氏



大阪展でトークをする2006年度優秀賞Palla氏



名古屋展会場風景 (電気文化会館)



名古屋展でトークをする2000年度特別賞澤田 知子氏

# New Cosmos of Photography

## 写真新世紀 2007年度優秀賞・佳作受賞者が決定！

2007年度写真新世紀の優秀賞選出審査会が、7月中旬にキヤノン株式会社下丸子本社で開催された。今回審査にあたったのは、レギュラー審査員の荒木 経惟氏(写真家)、飯沢 耕太郎氏(写真評論家)、南條 史生氏(森美術館館長)、森山 大道氏(写真家)の4名と、ゲスト審査員の榎本 了吉氏(アートディレクター)と韓国から招いた具 本昌氏(写真家)の2名。二会場にわたって並べられた応募作品をひとつひとつ丁寧に見ていく姿には、審査会ならではの緊張感が漂っていた。厳粛な審査の結果、それぞれ優秀賞1名と佳作5名を選出してくださった方々に、本年度の審査会に関して総評をいただいた。

**2007年度(第30回公募) 応募者数**  
1,277人

**2007年度(第30回公募) 優秀賞受賞者**  
青山 裕企(あおやま・ゆうき)  
黒澤 めぐみ(くろさわ・めぐみ)  
詫間 のり子(たぐま・のりこ)  
田福 敏史(たふく・としふみ)  
中里 伸也(なかざと・しんや)  
中島 大輔(なかしま・だいすけ)

**【レギュラー審査員】**  
荒木 経惟(あらき・のぶよし)  
飯沢 耕太郎(いいざわ・こうたろう)  
南條 史生(なんじょう・ふみお)  
森山 大道(もりやま・だいどう)

**【ゲスト審査員】**  
榎本 了吉(えのもと・りょういち)  
具 本昌(クー・ボンチャン)

(人名は全て五十音順、敬称略)



審査員(左から)飯沢 耕太郎氏、榎本 了吉氏、森山 大道氏、具 本昌氏、荒木 経惟氏、南條 史生氏

**荒木 経惟(写真家)**

人や場所や状況に素直に向き合って、何も考えずにぱっとシャッターを押す。写真っていうのは、本当はそれが一番良いんですよ。そうすれば、被写体の方のパワーが迫ってくるようになって、それが写真というジャンルの強みになる。でも、最近の応募作は、コンセプトualに頭で考えたり、カメラの機能を色々使ったりするものが多過ぎるのかもしれない。

被写体が良くないと良い写真にはならないという、単純なことにもう一度立ち返ってみたら良いんですよ。撮る側はもっと「無」になって、モノなりコトなり人なりに出会うことが大事。今回、荒木賞に選んだのは、その辺りのことを感じさせる作品ですよ。

今回、応募作に変化があったかどうかと言えば、そういうものは特にないでしょう。ただ、写真が上手というの、もう本当に当たり前のことになっているのは確か。だから、そんなところで勝負したって意味はない。それに、作り込んだ写真で、無理やりドラマを演出しようとしたって、弱いものしかできなくなります。やっぱり、それぞれ本当の人生の大事件を写さないと。濡れたり汗をかいたり、呼吸が荒くなっているのが分かる写真は、やっぱり伝わってくるものがある。被写体に対して、自分の気持ちに対して、素直でストレートなのがやっぱり良いんですよ。

**飯沢 耕太郎(写真評論家)**

例年に比べて少々大人しいかもしれませんが、質的なレベルは決して低くはなかったというのが全体の印象です。ただ、大きな流れの変化を感じ取れるといったことも、特にはなかった。日々の暮らしの断片を撮るといった作品は、相変わらず多いですね。それだけでは「ああ、またか」と思われて損をしてしまうかもしれないけれど、そういう写真でも今回は、カレンダー形式にしたり密着焼きを並べたりするような工夫をしている人がいて、見せ方によってはまだ色々な可能性があるなとも感じさせてくれました。

写真新世紀も回数を重ねてきて、いい意味で成熟してきているので、もう撮りっぱなしの作品ではだめという段階に入ってきたということなのでしょう。それから、応募の形式や枚数の制限がないのがこのコンテストの特徴ですが、そこに甘えるとあまり良い結果になりません。自分の中で量の限定をするなど、少ない点数で強い写真だけを並べてメッセージを明確に伝える訓練も課したほうが良い。そう思わせる作品が多くありました。

現代美術寄りの作品も増えてますね。とても細やかなテクニックを持つものが多くて、質が高いです。表面上の処理を美しくして完成度を上げていくのは、日本の写真家の得意分野のようです。そこで更に、自己主張を盛り込む方法まで確立できたら、更なるレベルアップにつながるだろうと思います。

**南條 史生(森美術館館長)**

最近の応募作の流れとしては、随分バリエーションが増えてきましたね。裏街を撮ったドキュメンタリー作品のようなものだけではなくて、作られた情景を撮影する「コンストラクテッド・フォト」が多くなりました。しかも、その手法は随分洗練されていて、単なる作りものには終わっていない。ドキュメンタリーに見えてやらせだったり、その逆だったり、境界を敢えて曖昧にしたような作風のものが見られます。

どうやら、写真はドキュメンタリーでなければいけないという考え方が薄れてきているようです。撮り手が描くストーリーと、被写体そのものの姿、その中間地点を行ったり来たりするような写真が出てきています。虚実皮膚のうちを、上手に漂っている感じです。

それと関係するのですが、一つの作品の中に、たくさんの視点を取り入れている作者も多く見かけました。「こういう見方をしてくれ」と強烈に主張してくる作品も良いのですが、重層的な意味を持たせて、色々な見方ができる作品というの、豊かさの一つの形だとも思います。

アルバム形で提出された作品は、特に質の高いものが多くなっていますね。若い人の作品でも、良く考えられてこなれているものがたくさんありました。こういうものが増えてくると、選ぶ側としてはどんどん難しくなっていきますが、見る喜びもあって嬉しいものです。

**森山 大道(写真家)**

中には数点、突出した作品もあったような気がしますが、全体として見ると、なんだか10人位の人がこの膨大な応募作の全てを撮ったんじゃないかという思いがしてきます。どれも似通っているなと感じてしまうんです。

写真はもともと、物事を等質に写す装置だから、類似性が出てくるのはある程度仕方ないところ。どの作品にも今の時代の感性が表れてくるわけですし、似ていることが一概に悪いとは言えない。それでも、タイトルが並んでいるようで、石ころがゴロゴロ転がっている印象はありません。撮影やまめ方はうまいし、編集能力も高いけれど、そのうまさを超えて突き破ってくる何かがある作品は少ないんです。

もっと実験や冒険をしたり、無茶をしても良いんじゃないですか。ああしたい、こうしたいという、個人の欲望に根ざすものが、もっと感じ取れる方がいい。うまく見せようとか、格好良く撮ろうというのは、本当は二の次のことだと思います。欲望をさらしていくというのは、確かにけっこう難しいことではあります。でも、それをやらないと、このたくさん作品の中から抜け出ていくものにはなっていないでしょう。

**榎本 了吉(アートディレクター)**

かつて「日本グラフィック展」や「アーバナート展」などに携わり、他の表現ジャンルと併せて写真を見る機会も多かったので、写真の持つ力の面白さはずっと感じていました。

今回たくさんの作品に触れて感じたのは、生活感に満ち溢れているものと、静かな風景を切り取ったもの、両極の作品があるのだということ。自分としては、その両極のうち、人がいない場面を切り取った作品の方ばかりを選ぶ結果になりました。空虚で生活感が希薄な、造形的な空間を凝視した写真の方が、時代の意味をより汲み取っている感じがしたからです。



もくもくと審査に取り組む審査員の方々



審査員同士で意見交換をする場面も



森山 大道氏の大ファンだという具 本昌氏。再会を喜ぶ握手



応募作品を一つ一つ丁寧に審査するゲスト審査員の榎本 了吉氏



二会場にわたってところ狭しと並べられた応募作品

デジタルを介した作品があまり残らなかったのは、少し意外でしたね。やはり写真には、リアリズムが極めて重要なのだらうと感じました。デジタル技術であまり作り込み過ぎてしまうと、リアルな部分が薄れていって、写真として残すべきものがなくなってしまうのかもしれない。

ただ、そこにもっと挑戦してみてもいい。写真を使って表現する人には、「フォトグラファー」と「フォトアーティスト」がいると思います。「フォトアーティスト」を志向する人が、リアリズムと離れてどんなものを作れるか見てみたいです。今回はそこまでの作品に出会えなかったのが残念なところでした。

**具 本昌(写真家)**

今までに写真の審査をしたことはありませんでしたが、これほどたくさんの応募作が集まる大規模な審査をするというのは初めての経験でした。応募作の形式が自由であるというのは、選ぶ側にとってはなかなか難しい面がありますね。バラエティに富んだ作品が見られるのは良いのですが、ポートフォリオもあれば一枚の大きなプリントもあるので、それぞれを比較するのは大変でした。

そのせいもあるのでしょうか、全体を見終わったとき、とても多様なスタイルの作品に接したという印象が残りました。特に、ブックの形にしてあるものの中に完成度の高い作品が多かったように思います。

日本には既にたくさんの著名な写真家がいる、そうした先輩作家が言わば写真の「日本スタイル」とでも言うべきものを確立しています。今回の応募作を見て、やはりそうした日本スタイルが維持、継承されているものだと感じました。こうやって伝統が作られていくのだらうということが確認できた気がします。

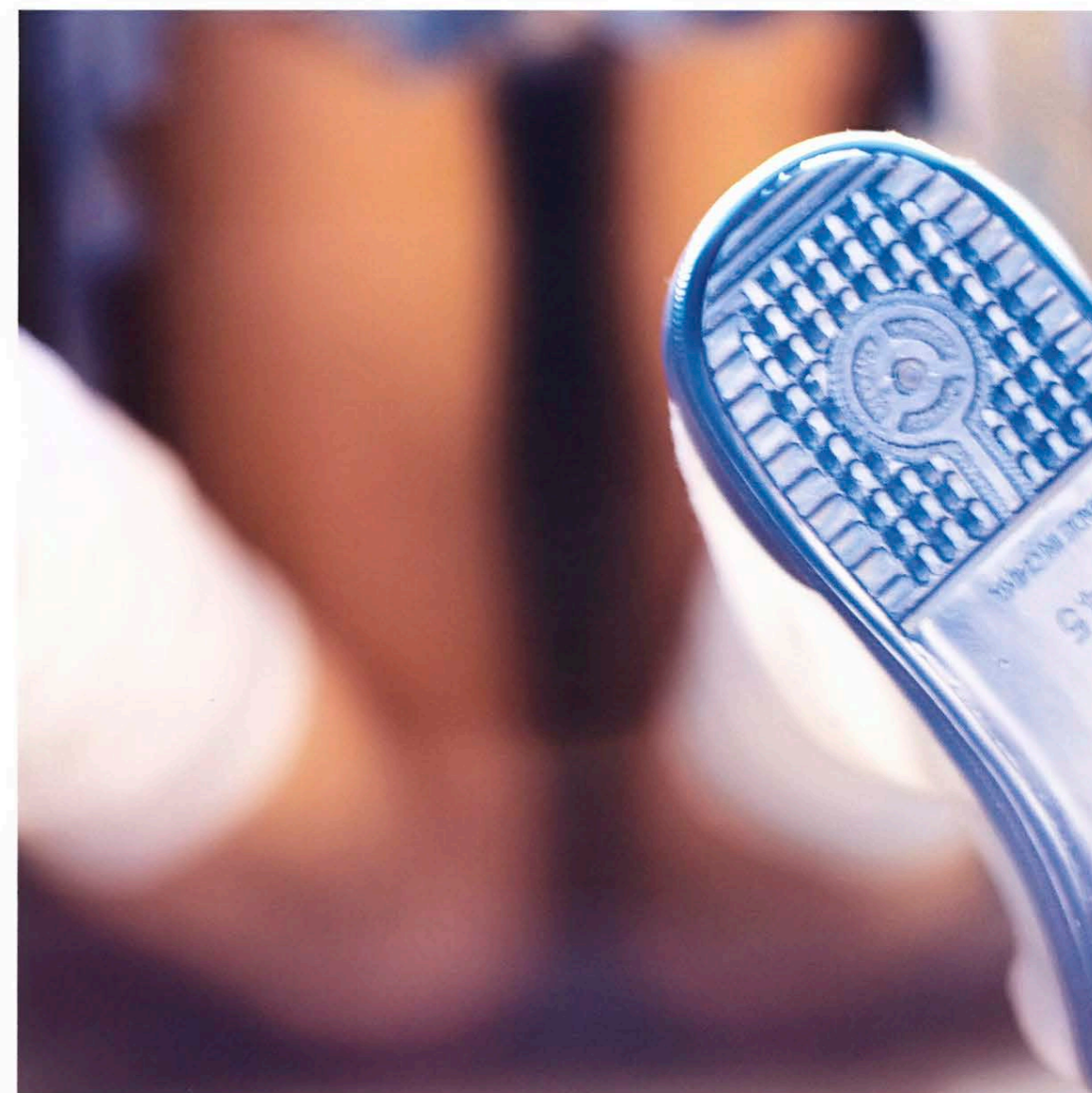
このような大規模な公募の場があるというのは、韓国の写真界から見るとある意味でうらやましいものです。韓国でも、写真を志す若い人はたくさんいますが、日本には写真を愛好する人の裾野の広がりがあることを強く感じました。

(審査員コメント構成=山内 宏泰)

2007年度優秀賞  
青山 裕企

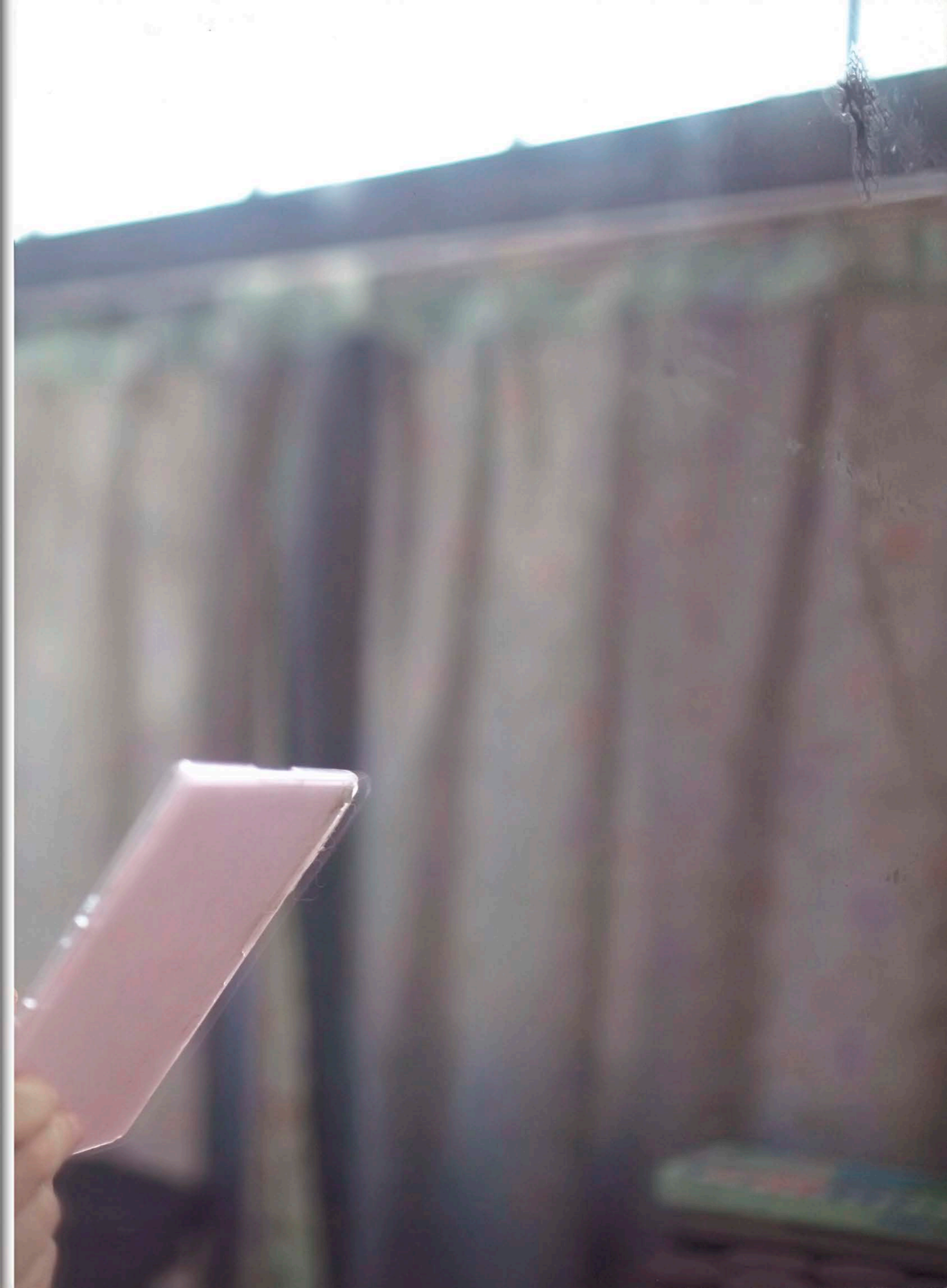
# 「UNDERCOVER」

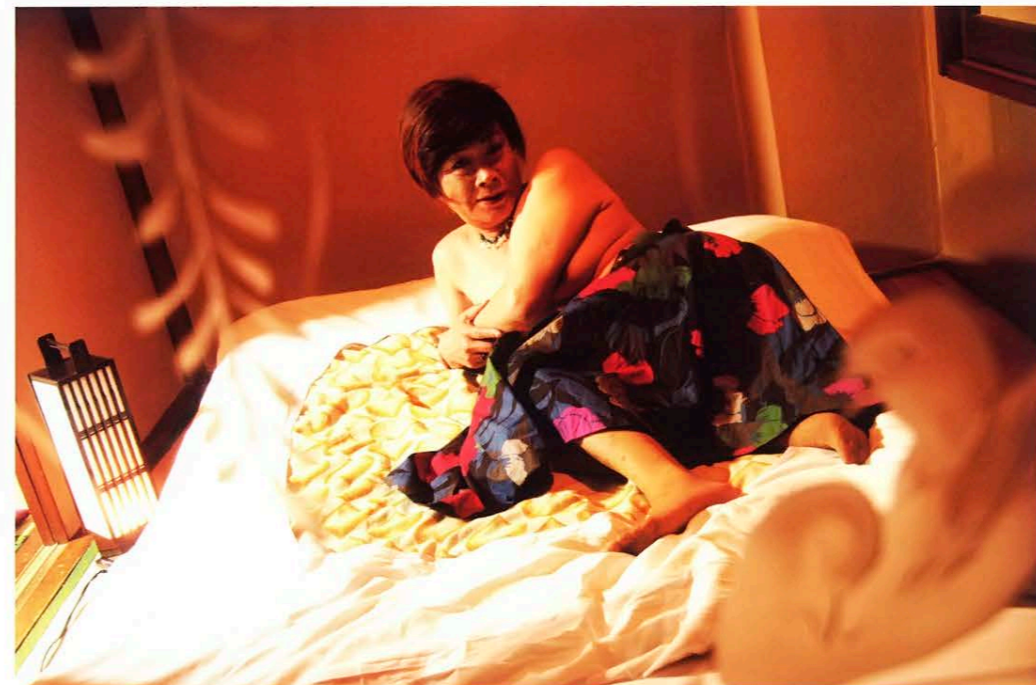
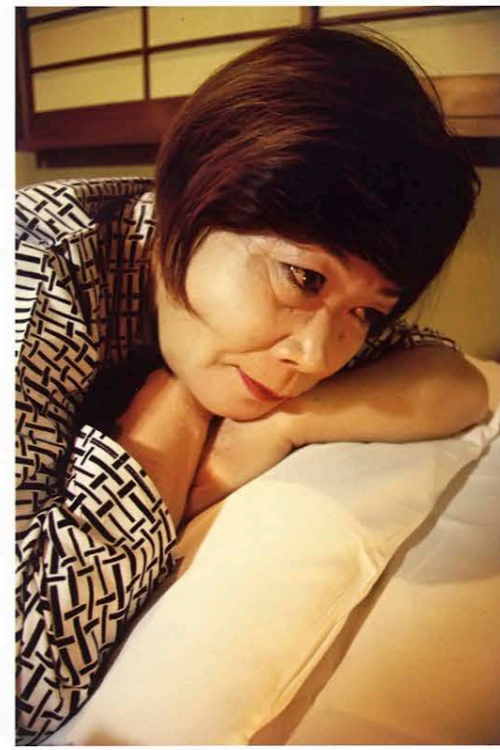
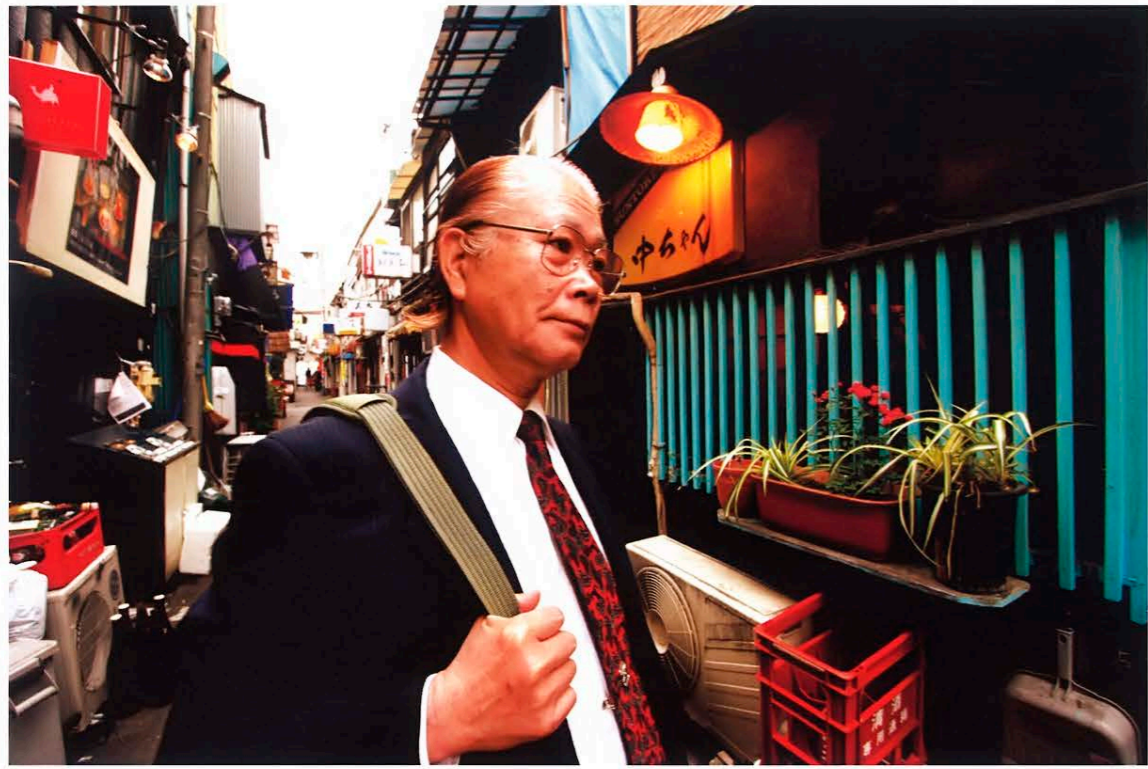




2007年度優秀賞  
黒澤 めぐみ

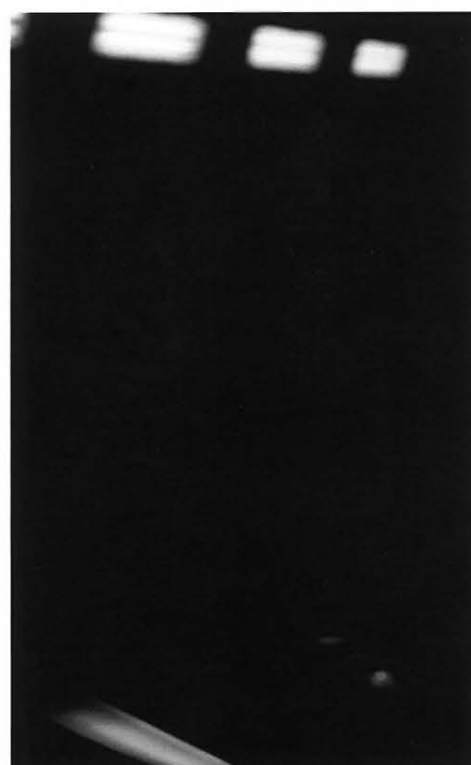
「二重性活」







「まばたき」





2007年度優秀賞  
田福 敏史

「さよならリアル・ワールド」

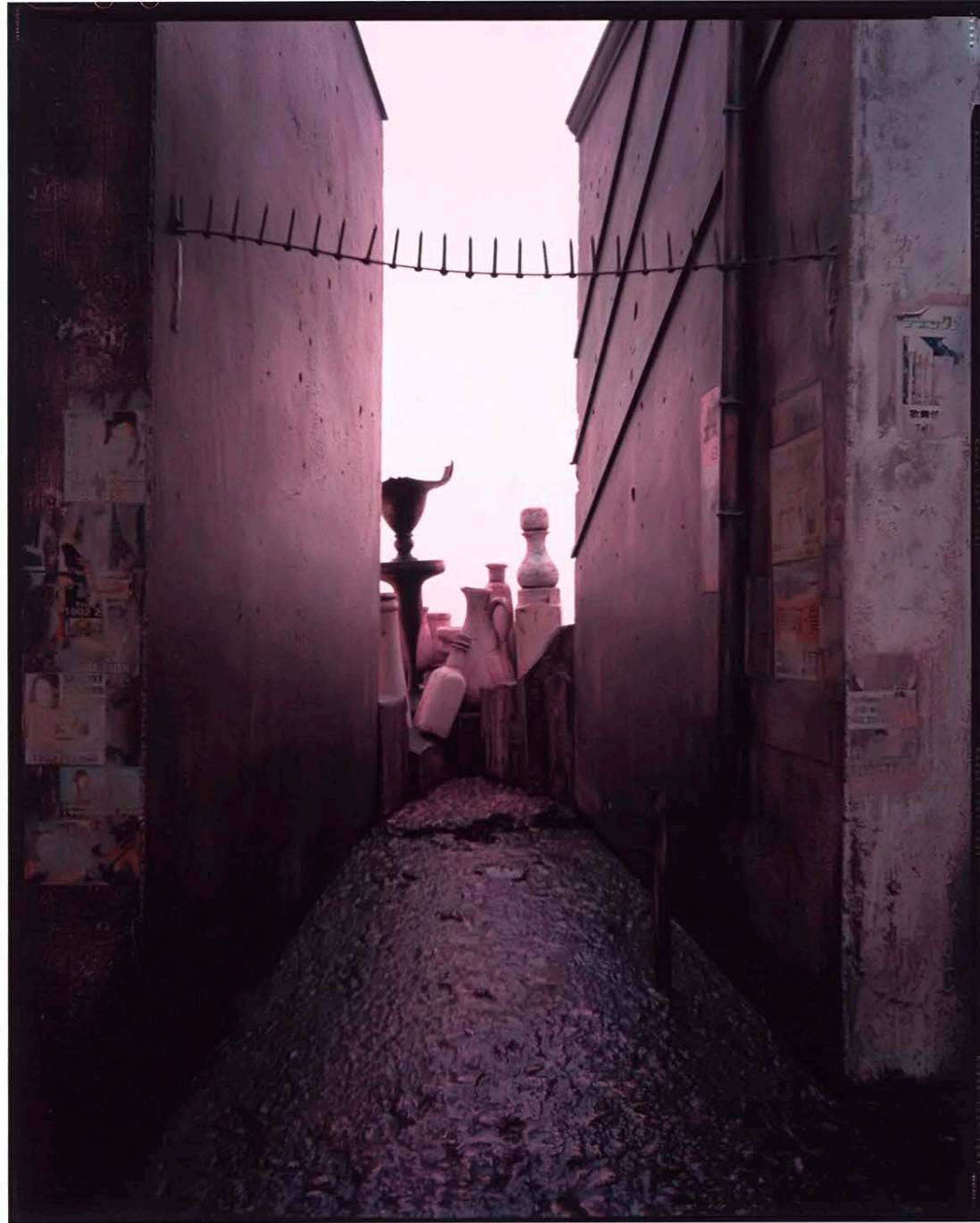




2007年度優秀賞  
中里 伸也

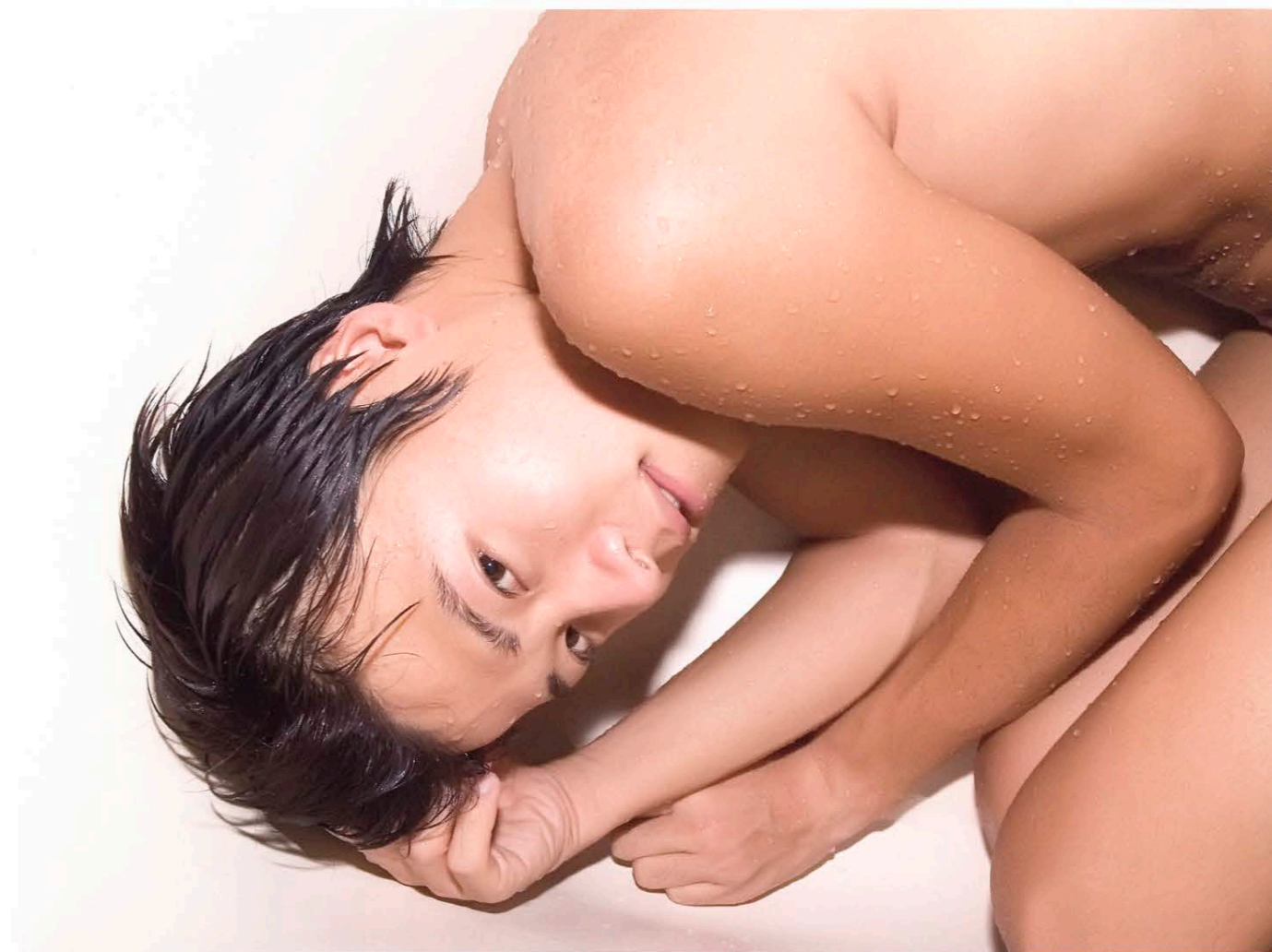
# 「Conversations with Stillness」

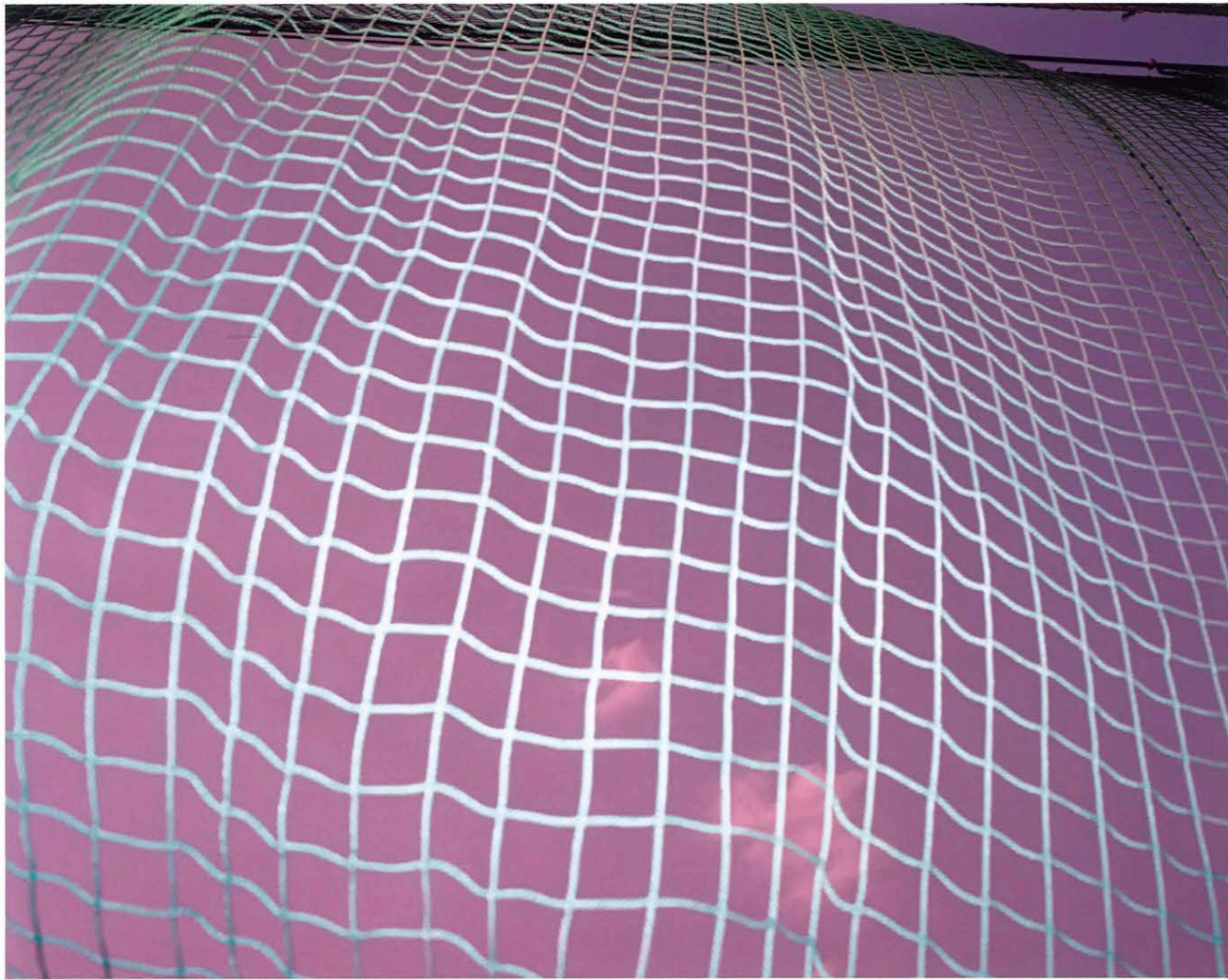




2007年度優秀賞  
中島 大輔

# 「喪失メトロノーム」







## 優秀賞者コメント

**氏名**  
**作品タイトル**  
**作品形態**  
**コメント**  
**プロフィール**  
**審査員評**

**青山 裕企（あおやま・ゆうき）**  

**「UNDERCOVER」**  
**タイプCプリント 額装 500mm×500mm 9点**

ぼくが思春期の頃に描いていたファンタジー。女の子は、まだ手も触れたことのない、淡くどこまでもピュアな存在。だから生まれてしまう欲望や妄想を具現化すると、こんな感じになる。

童貞な頃のぼくにとって、女性はとても怖くもあり、エロティックであった。制服の向こう側に広がる世界を知る由もなかった（情報は溢れんばかりあったけど）わけで、とにかく想像を繰り広げるしかないのであった。

それでも歳をとり、女性を知り、いつの間にか結婚した。ふと気づけば、なにかと知りたくてたまらなかった“若氣な自分”とは決別し、いろいろ知ってしまった“大人な自分”と対峙していた。

世の中には、知らないと困ることが沢山あるけれど、知らないほうが幸せなことも、それなりにある。若氣な頃の、まだ知りえぬものへの想像力の翼は、なんて鋭く運しかったことだろう！

届かなかった、見ることのできなかった、秘められた存在。思春期の、脆いけどぐつぐつと煮えたった、むっつりとした欲望。くすぐられ、結局はくすぐってしまうという循環。それこそが、淡くファンタジックな青春。

もうそんな時代には帰れないし、帰らなくてもいいのだけれど、"若氣な自分"の欲望や妄想がマグマとなって、この作品を作り上げた気がしています。などと大層なことを言いながらも、結局は“大人な自分”のフェティシズムの追求なのかもしれません。

この度は、選んでいただき本当にありがとうございます。ありがとうございました。

**プロフィール**  
1978年4月15日 新潟県生まれ  
2005年 筑波大学人間学類（心理学専攻）卒業  
2005年 個展「空跳博-JUMP EXPO 2005-」

PUNCTUM（東京）  
2006年 個展「ユカイハズをよろしく。」  
PUNCTUM（東京）  
2007年 個展「ソラーリマン-JUMPING PAPAS-」新宿眼科画廊（東京）など展覧会多数  
受賞歴は、「第34回社団法人日本広告写真家協会公募展」「ワンダーシード2007」「トーキョーワンダーウォール公募2007」入選  
現在は、フリーランス・フォトグラファーとして活動中  
ウェブサイト http://yukiao.jp

**選：南條 史生**  
　今まで見たことのないものが出てきたな、という強い印象を残す作品でした。現実の世界ではあり得ないだろうというシチュエーションの写真ばかりですが、でもひょっとするとこういう場面を見たことがあるかもと思わせるところもある。不思議な感覚に陥ります。
　たしかに女子高生という被写体は、使い古されているかもしれない。でも、その被写体の意味に頼ることなく、一つの材料として扱って、画面を構成しています。その上で、女子高生という存在が持つフェティッシュな雰囲気も利用するという、複雑なことをしています。
　人間の体を、人格から切り離して、まずは徹底的に部品として使ったというところが、新しさを感じさせて、作品を成功させる要因になっていると思います。

**黒澤 めくみ（くろさわ・めくみ）**  


**「二重性活」**  
**ブック A4 PICTRAN 15点（表紙別）**

被写体になってくれた奈々子さんは体が男で心は女。それは、親にも妻にも同僚にも言えない秘密でした。

好奇心のままにカメラを向ける私に対し、奈々子さんは惜しむことなく自分をさらけ出してくれました。私はレンズを通して彼女の67年間の二重「性」活を見たのです。そして彼女が持つ女性へのピュアな憧れや幻想は、女である私に本来女性の持つ美しさと奥深さを教えてくれました。

「私は八方美人で欲張りなの。だからこういう生き方になったのよ」と彼女は言います。


家族を傷つけない、社会の中で普通の暮らしをしたい、だけど女でありたい・・・あらゆる制約に縛り付けられながらも奔放に人生を謳歌する奈々子さんは性別を超越した魅力を放っていました。私はそんな奈々子さんに夢中になったのです。

人は自分の存在の意義を他人の意識の中に求めるのかもしれません。彼女の願いは「世間から女であると認められたい」という事です。その気持ちが抑えきれなくなったとき、この写真達に新しい意味が生まれ、動き出しました。

これは写真を使った人生のカミングアウトです。この作品が奈々子さんの人生により大きな幸福をもたらすことを願います。

**プロフィール**  
1982年6月2日 東京都生まれ  
2005年3月 大妻女子大学家政学部 卒業  
2005年4月 銀行へ就職  
2006年8月 銀行を退職  
フリーランスのフォトグラファーとして活動を始める

**選：荒木 経惟**  
　写真としての力もあるけど、何よりも被写体の存在感が抜群なんですよ。こんな父ちゃんとなら、一緒にビールを飲みたくなるでしょう。
　これぐらいに濃い人生を写してこそ、ぐっと迫ってくるものになるんです。こういう写真を見ていたら、別に最近の流行がどうしたこうしたなんてことは、関係なくなってしまう。やっぱり、自分の目の前にあるコトやモノをちゃんと見つめる。それしか方法なんてないことがよく分かりますよ。
　ただ、ブックの中には、つまらない写真もけっこう混ざっていると思う。そのあたりで、せつかくの勢いが削がれちゃっています。余計なものは思いきって取り払って、ちゃんと相手と向き合った写真だけを、できるだけ大きく引き伸ばして見てみたいという気がしますよ。

**詫間 のり子（たくま・のりこ）**  

**「まばたき」**  
**ブック立体物（蛇腹式折本、六切変形）**  
**モノクロ55点（表紙別） 　バライタ紙**

当たり前さらに流されていく映像をいつもまばたきしながら見ている。切り取りそしてまた流し見る。平行に進行している時間と人々と視線と呼吸。

平行線をたどりながら、静かな線になる。まばたきなのか。それは、記録なのか。旅なのか。夢なのか。はて、まばたきなのか。

息をするように　まばたきをし  
働くように　まばたきをし  
恋をするように　まばたきをする  
叫ぶように　目を閉じる  
そして　まばたきをする

何かの縁で一本の線がつながりました。ここから大きく太い線にさらにつながりますように。

**プロフィール**  
1985年 大阪府生まれ  
2004年 京都造形芸術大学情報デザイン学科写真コース入学

**選：森山 大道**  
　妙に気がかりになった作品でした。ほんの一瞬、目の端をちらとくすめたような、残像に近いような感覚の写真ですけれど、これがなぜかこちらの気持ちにしっかりと残るんです。
　それぞれの写真は、シチュエーションとして特につながらもないのに、なんだか同じ乗り物からずっと外界を見ているような感覚になってきます。一瞬が積み重なって行って、残像としてつながっていく。写真が本質的に持っている力みたいなものも、強く感じさせますね。
　このブックの形式による効果も大きいでしょう。小さいプリントをまったく同質に並べていて、写っている世界だけが変化していくという面白さがある。大きくプリントしていたら、こうはならなかったかもしれない。ひそやかにささやかな作りだけけれど、実はそうじゃない。記憶というものを見る側に喚起させるところもあって、圧倒的に心に残りました。

**田福 敏史（たふく・としふみ）**  


**「さよならリアル・ワールド」**  
**ブック形式（美術製本） A3**  
**カラーインクジェットプリント154点（表紙別）**


現実とは一体何なのか。リアルであればあるほどリアルから遠ざかる。散々言い尽くされたことであろうが、僕が写真を撮るときそしてそれを見るとき、いつもその問いが頭をよぎり、この深淵とも言うべき現実という名の底なし沼の、その深さにたじろぐばかりなのである。だがしかしあまり深く考えてもしようがないのも事実である。何故なら写真は僕の中途半端な思考なんかを百億光年ほども越えたところに存在しうるポテンシャルを常に秘めているし、僕が表現したいことがもしあるとするならばそういう何かを超越したものであるからだ。

そう、僕は機械のように撮ることしかできないしそれで良いと思っている。誰が撮っても同じような写真だからこそ現実の四次元的な深みを感じられる。僕は無名性の向こうがわにある何かを求め。そして写真は一人歩きし、世界のあらゆる記憶とリンクする可能性を示唆する。それはきっと「写真でしかできないことはなんだろう」の問いに答えるものであるはずだと僕は信じている。

**プロフィール**  
1979年 広島県生まれ  
2005年 写真新世紀 佳作・奨励賞（森山大道選）  
2005年 カラーイメージングコンテスト 入選  
2006年 神戸芸術工科大学芸術工学部視覚情報デザイン学科卒業  
現在東京都在住  
ホームページ：http://toshifumitafuku.net/

**選：具 本昌**  
　平凡な日常を撮っている作品ではありますが、瞬間、瞬間をしっかりと押さえて、固定していく能力を備えていると思います。ここに写っているも

のは、現実でよく見かけるものばかりかもしれませんが。でも、この作者がフレームに収めることで、詩的なものになったり、また、非現実的なものに思えてきたりと、色々な表情が出てくる。何気ない世界が、見る側に強く訴えかける力を備えるものへと変わっています。
　プリントの完成度が高いし、ブックの構成や、見開きごとの配置なども、とても良いものがあります。色使いやコンビネーションがうまく成功していて、その確かな「目」には感心します。
　作品の量がたっぷりあって、めくっていると強いエネルギーを感じます。普段見慣れてしまった現実を、新しいものにして見せてくれています。

**中里 伸也（なかざと・しんや）**  

**「Conversations with Stillness」**  
**カラープリント 大全紙（50.8cm x 61cm） 7点**

ここ2年ほど、写真をもとに作品を制作してきました。もととなる写真はウジェーヌ・アジェの写真です。アジェは19世紀末から20世紀初頭にかけてパリを記録したことで有名な写真家です。近代化のため消滅しつつあった19世紀的パリを、後世の為に記録し続けた彼の姿勢に写真本来の姿や原点を感じたのが、自分の作品に彼の写真を選んだ理由かもしれません。

このような制作手法に至るまでにいくつかの理由があります。何か新しい手法を探していたこともありまし、自分の関わる写真についての疑問もありました。しかし、一番の理由はもう少し根本的な「見ること」への疑問だったと思います。例えば、古い写真を見ている時もどかしい感覚を覚えることがあります。その写真は明らかに現実に存在した世界であり、誰にとってもそれは自明の事であるにも関わらず、現実感が希薄に感じられるのです。このような経緯から、最初に「写真を見る」ことを据えた制作に至りました。


過去の写真を見て、被写体を制作し、撮影する、そのような制作過程を通して「見ること」について考えています。

**プロフィール**  
1973年4月13日 東京都生まれ  
2003年 プラット・インスティテュート写真学科卒業  
2006年 写真新世紀 佳作

**選：榎本 了彦**  
　どうやって作った写真なのか、最初は分かりませんでした。こんなに造形的な世界というのが、この世にあるのだろうかと思ってしまいました。
　結局、ストレートな写真ではないということが分かって納得しました。フレームなど、細部にわたってうまく処理もしてあるので、すんなりとだまされてしまいそうでした。この完成度の高さには感心します。

人の気配や生活感にあふれたシチュエーションを写真にするのも一つの方向性ですが、もう一つ

の極にあるような作品がこれです。ありそうでないような、造形的な世界。こういうものを目に見える形で表現するというのも、写真の在り方でしょう。額縁に入れて飾っておきたくなくてくる写真です。

**中島 大輔（なかしま・だいすけ）**  

**「喪失メトロノーム」**  
**ブック形式 インクジェットプリント（A3サイズ）58点**

自分はいつの間にか忘れていくのに、相手にはいつまでも自分のことを覚えていてもらいたいからなんて、そんな矛盾で撮っていた。友達が死ぬまで、彼が生きているという実感が無かった。僕の乗った一つ先を走る電車が脱線してマンションに突っ込んだ時、あ、自分以外の誰かも生きているんだと思い出した。個々の脈拍とのズレを知ってしまった。

でも、僕がシャッターを押したい瞬間に、相手が目を閉じてしまったのなら、僕は相手が目を開く次の瞬間まで、ただシャッターを押し続けられればいいだけだ。昨日愛した人を、いづれは忘れ、そして忘れられてしまうであろう僕は、失う事を受け入れながら、そのズレさえも愛せばいい。

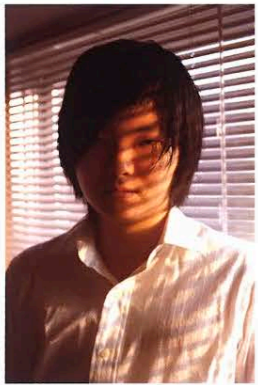
僕が撮りたいのは、今「見た」景色なんかじゃ無い。僕が撮りたいのは自分がこれから「見たい」景色。全てはいつか消えていく。だから僕は写真で誰かと日常を作っていく。

**プロフィール**  
1983年7月14日 大阪府生まれ  
2006年3月 関西大学社会学部社会学科産業心理学専攻卒業  
2006年7月 Mio写真奨励賞 審査員特別賞 選考：笠原美智子（東京都写真美術館事業企画課長）  
2007年 ビジュアルアーツ専門学校・大阪写真学科夜間部卒業

**選：飯沢 耕太郎**  
　構成の仕方などにはまだ物足りない部分もありますが、モノの見方や切り取り方には、他の人が真似できない天性のものがあるように思います。特に、同性である男の子を見る目は、クールでありつつも感情的なものがぐっと入ってきていてユニークです。共感のレベルが高いというか。
　画面を単純化する能力にも長けていますね。若い人だと、つい何でもかんでも画面に盛り込んでしまいがちです。でもこの作家は、言いたいことをうまく絞り込んで、ノイズを最小限に抑える方法を知っている。しかもそれが的確です。
　写真の並べ方が少しづつ切りになり過ぎていたりもしますが、展示をするときなどはもう一度しっかり練り直せばいい。大いに将来性を感じさせると思います。

## 2007年度佳作

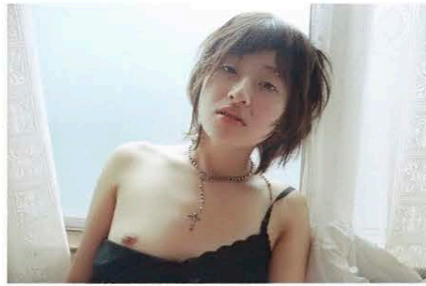
※氏名・作品タイトル・作品形態・コメント・審査員評(談話構成=山内 宏泰)



岡部 桃「かおり」  
B4写真集 カラーコピー 110点

「荒木さんに写真を見てもらえて幸せです」

荒木「写真がとても美しい、被写体の彼女のポートレートがいい。それに、彼女の写っていない風景の写真にも、彼女の気持ちがにじませてあるんじゃないですか。それくらい彼女の気持ちをきちんと感じてまとめているのが伝わってくる。切なさがよく出ていますよ」



佐藤 裕之「ただそれだけ」  
カラーネガプリント68点 ブック形式(12inch×12inch)

「ただ心で、肌で感じたままにシャッターを切った。そこには本物があると信じていたから」

荒木「被写体への気持ちをこれだけ素直に出しているものは他にないでしょう。このところ写真の質が上がって、完成度が高いものが多いけれど、それよりも大事な、二人の関係性がしっかり出ている。一人じゃこういう写真にならない。気持ちの交換がちゃんと写っていて、こういうのが写真の原点です」



助田 徹臣「空気の底」  
手製本B4変形 大四切プリント 20枚

「web : <http://tetsuomi.jp/>  
mail : [sukeda@gmail.com](mailto:sukeda@gmail.com)」

荒木「若さがしっかり出ていて、そこが良いですよ。写真の、それから人間の基本にはエロスがあるのは絶対に間違いないわけで、そういう人間の初期のエロスを感じます。二人の関係性もよく分かるし。そういうのがないと、写真は面白くならないんです」



鍵岡 龍介「春風接人」  
写真集 ハードカバー 写真22枚構成  
サイズ250mm×330mm×30mm  
ネガ写真 インクジェットプリント

「誰かを、こそばゆくすることが、大切。見る人が、人のこそばゆいことを探すようになれば、たのしいです」

飯沢「モノの見方がどこまでも繊細で、その作者の資質がうまく出ている作品になっています。ブックの最初と最後に絵の具のパレットが出てきて、それによって時間の経過を表現する手法も効果が出ています。手足の指を撮った写真など、目の付け方も面白い。被写体への細やかな愛情を感じます」



田村 俊介「死ぬまでの850日」  
カレンダー サイズA2 インクジェットプリント およそ850点

「毎日親父を撮っていました。850日目くらいに死にました」

飯沢「日々の記憶をカレンダーの形にするというのは、意表を突いていて、見せ方として彼なりの工夫があります。被写体である父親との関係は、きっと複雑な愛憎があるのでは? そういうことを想像させる作品になっています。ユニークなもの見方ができて、表現力のある作家だと思います」

具「全体をカレンダーの形にするというアイデアは、新しいプレゼンテーションの形として面白く感じました。肉親が亡くなるまでの期限付きの日々を撮るという内容と、この形式がとても良くマッチしています。ただし、一点ずつの写真の完成度によらずつきがあるところは気になりました」



中田 証志「モデルします」  
四切35枚

「ネット上に、自ら『モデルします』と書き込んでいる人達を撮りました。衣装は全て彼女達のものです」

荒木「最も時代がよく出ていると思った作品がこれ。インターネットでこういう関係性を結ぶこと、これが今の方法論なんでしょう。どれほどバカな時代になっているかがよく分かる。当世風で、現代の浮世絵とも言えそう。ただ、ちょっとカタログ的になってしまっているのかもしれない」



山口 理一「2007.5.28 Brooklyn」  
全紙25点

「グローバル化する世界で均質化する文化や個人の差異を、写真によって顕在化する試みとしてニューヨーク滞在中に制作した作品です」

荒木「写真でいちばん大事なものは、被写体とぶつかり合って凝視し合って、気持ちをさらけ出したり隠したりすることです。それをきちんとやっているところが良いんです。社会性も出ているし、ひよっとするところというのが、究極のフォト・ドキュメンタリーと言ったことかもしれない」



魚本 勝之「Catch me if you can.」  
ファイル(カラープリント10inch×12inch 60点)

「誰でも撮れるけど、誰も撮れない。そんな写真を目指して走り回っています。佳作。ありがとうございます!」

飯沢「風景のなかに、ボーリングのピンをどうはめ込んでいくかという構成の妙があります。コンセプトを貫いていく力もある。粘りがあって、とても丁寧な作りの作品です。デジタル加工しているわけではないので、これはすごい労力がかかっているように見えます。見れば見るほど面白さが湧き出てきます」



武壮 隆志「だんご虫ボーイ」  
A3ファイル インクジェットプリント40点

「障がいをもっていても養護学校ではなく、健常児と同じ地域の学校に通っているだんご虫の大好きな彼の日常の記録です」

飯沢「ちょっと気味の悪い虫を撮るのは好みに分かれるかもしれませんが、主人公になっている子供のキャラクターが抜群に面白い。作り込んだ写真が多くて、ストーリーもよく練っているのですが、最後のオチなど、うまくいっているとは言えない。整理して組み直せば、さらに良い作品になりそうです」



梁 丞佑「チューインガム」  
インクジェットプリントA3 150点

「自分をとりまくものを撮った。そしたら自分が見えて来た。でもいまだにまわりが見えない。結局自分しか見てなかった」

飯沢「撮りたいもの、写真でやりたいことが、既にとてもはっきりしている人ですね。無造作に見えて、実はコントロールがしっかりと効いている。行き当たりばったりではなくて、クールな目を持っています。このまま、ラリー・クラーク『タルサ』の韓国版を目指してほしいです」



金田 なお子「たまくら」  
A3ポートフォリオ 35枚

「そこは魂の倉のよう。よごと魂が入っては きていく」

南條「カーテンやベッド、シーツなど、ミニマルな世界を写していますが、そこにかすかに情念的なものが残っている。抑制の効いたバランス感覚や、洗練されたセンスが絶妙です。都市の風景を撮った写真も入っていますが、ストーリーに影らみを持たせるなら、シーツや枕の写真が少し多すぎるのかもしれない」



武田 陽介「SF」  
インクジェットプリントA4 28枚

「不確かさを作品として展開していくことで、現実を捉えなおすことができるという可能性を提示していきたいと考えています」

南條「情緒的な部分は排除されて、現実をシュールな情景に置き換えています。普通の風景がどこまでも人工的なものに見えたりして、不思議な雰囲気ですね。そこから、この人の視点がはっきり分かってきます。色調のバランスが良いし、アルバムとしてのリズムも良く出ていると思います」



谷 直恵「陰影」  
305mm×305mm インクジェットプリント 37点  
40ページ

「1年間影だけを撮り続けました。賞に選ばれた事を光栄に思い、きっかけと自信を与えてくれた人達に大変感謝しています」

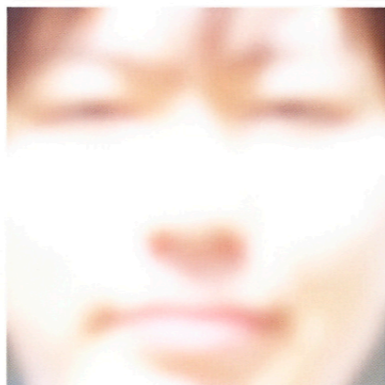
南條「何を撮ろうとしているか、何を表現したいのか、狙いかはっきりとわかるモノクロ写真です。独自の雰囲気も醸し出していて、黒色がきちんと美しく出ている。モノクロ写真はこれからも、表現形態として可能性のあるジャンルですが、その場合はプリントのクオリティが重要になるでしょうね」



西澤 諭志「絶景」  
インクジェットプリント 1,180mm×840mm 15点

「写真をじっくりとみる為に制作しています。何でも簡単に、みた、わかった、という気分になりたくないからです」

南條「建築のインテリアをディテールとして撮って、自分の中のビジョンに従って再構成しています。バーチャルなイメージを、これだけ明確に作り上げられる力がある。構築的な確かな目を持っている人だと感じました」  
具「画面構成の面白さを感じさせる作品です。面より線を強調して、統一性を持たせているところが、独自の雰囲気も醸し出しています。こういう幾何学的な空間を撮るといのは、このところヨーロッパの写真でもよく見ます。ここから更にオリジナリティをどう出すか、考えていかないといいけませんね」  
榎本「写真とは何か、と問いかけながら撮っている作品。行き当たりばったりではなく、とても思索的に物事を見つめています。うっとうしいほど人間の生活感が出ている写真の良さもあるのでしょけれど、どろどろしたところから少し離れて、意味のないものを何気なく撮る気持ち良さもあると思います」



藤田 常人「My models」  
写真集(A3短辺297×297 印刷用特殊紙に  
インクジェットプリント36ページ)

「見たいように見て、それぞれ色々な事を考えてくれたら幸いです。撮らせてくれたみんな、ありがとう」

南條「敢えてボカした写真によるポートレートです。同じ手法の作品は他にもあったのですが、これはシリーズとして展開できる可能性が高いように思えました。顔はボケているけれど、ちゃんと情報は確保してあって、今の日本の若い男女の雰囲気がちゃんと伝わってきます」



伊藤 正博「僕にジョウロで水をかけてください。」  
ブック(297mm×300mm) インクジェットプリント 69点

「謙虚さとthanksの気持ちを忘れずに撮っていきたいです。ありがとうございます」

森山「この人の持っている欲望みたいなものが、はっきりと写真に出ています。変な視線で撮っていますけど、ちゃんと写真でしか写らないものをおさえているし、編集の仕方も上手なものです。あざとさをうまく隠す方法も知っていたりして、かなりしたたかな人ですね」



エグチ マサル「生きている」  
ブック形式 390mm×290mm モノクロプリント  
パライタ紙 184ページ(表紙を含む)

「他の作品はホームページ( <http://www.eguchimasa.ru.com/> )から御覧になれます」

森山「この人の体質が作品にはっきり出ています。撮ることに対して、ファナティックな感じがありますよ。食べていても、遊んでいても、女の子を撮っていても、どうしようもなくいかわしいし、うさんくさい。そんな負の要素みたいなものが、この人の場合はプラスになっているんですね」



Arnel Javier「Photo Blog:Javier-san」  
ブック形式 A4 122点

「外人として、私の日本での生活を記録したら面白いと思いました。ある1週間、私は目を覚ましていた一時間毎に一枚の写真を撮りました」

森山「日常でつい見逃していたり、目に入っても敢えて写真に撮ろうとはしなかったりするものを、きちんと撮っている。今の日本を表す客観的な資料を見ているような感じもしてきます。プリントもかっちりとしていて、一枚ずつが、都市の日常の記録になっていますね」



藤田 愛子「9-14」  
モノクロ 銀塩 50点

「いろいろな面から、助けてくれた人達みんなにとっても感謝しています。よい機会を頂き、ありがとうございます」

森山「不思議なセンスがある写真です。自分の日常空間という狭い範囲の中で、変身しようとしてもきれいなようなもどかしさが伝わってくる。たゆたうような、気持ちのプレカ画面にしっかり写り込んでいます。自分の家で撮ったものも多いのですが、その中でもとてもうまくいっている作品です」



南口 健一「デイバイデイ」  
ファイル 六切カラーネガプリント240点

「次は優秀賞！！」

森山「1ページに2点ずつの写真を並べる組み方が、無理なく成立しています。こういうのはあざとくならがちですが、さらっとできている。さりげない場所を撮っていても、断片をちゃんと拾っています。目がスクベな人だなとも思いますね。これは写真の重要な要素ですよ」



安達 英莉「家族で父で私」  
インクジェットプリント A1 7点

「賞をいただいたことで初めて女性でよかったと思いました。家族と私の近況と過去の記憶の写真です」

榎本「やらせによる捏造写真なのですが、少しどこかほころびがあったり壊れていたりして、ぼっち決まっていな。そのリアリティが面白いです。ユーモアもありますし、やっている本人がちょっと照れていたりするの伝わってきて、写真を作っていくのを、楽しんでいる感じがありますね」

## 審査員プロフィール

**2007年度（第30回公募）**

**レギュラー審査員**：荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 森山 大道

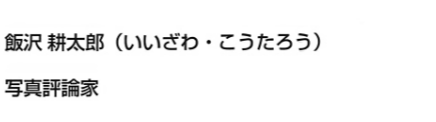
**ゲスト審査員**　　：榎本了彦 具 本昌



**荒木 経惟（あらかき・のぶよし）**

**写真家**

1940年生まれ。東京都出身。千葉大学工学部写真印刷工学科卒業。1964年「さっちゃん」で第一回太陽賞を受賞。1971年、新婚旅行を克明に写しとめた実質的な処女写真集『センチメンタルな旅』を自費出版し話題となる。作品のテーマは現実と虚構、愛と性、生と死などで、「私写真」という独自の世界を確立。常に先進的な方法論で社会の注目を集めてきた。これまでに発表してきた作品集は350冊以上にのぼり、展覧会も国内外問わず精力的に開催している。近年開催された展覧会には、東京オペラシティアートギャラリーで森山大道氏とともに開催した「森山・新宿・荒木」展（2005）や、ロンドンのパービカン・アート・ギャラリーで開催した大規模個展「私・生・死」（2005秋～2006初頭）などがある。また2006年秋には、東京江戸博物館において作家の人生と東京の歩みを重ね合わせた企画展「荒木経惟 ー東京人生ー」を開催したほか、同年12月にはこれまでに発表した357冊すべての著作に、飯沢耕太郎氏による解説をつけた『荒木本！1970-2005』（美術出版社）を発売した。



**飯沢 耕太郎（いいざわ・こうたろう）**

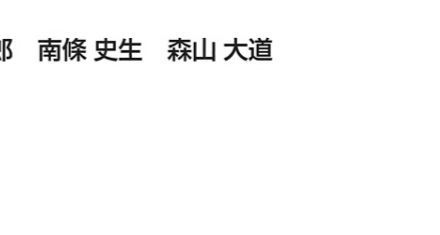
**写真評論家**

1954年生まれ。宮城県出身。1977年日本大学芸術学部写真学科卒業。1984年筑波大学大学院芸術学研究博士課程修了。1990年季刊写真誌「デジャヴュ」を創刊、編集長となる（1994年1月まで）。日本写真史を中心にフィールドワークした活発な著作活動のほか、イラスト、コラージュなど写真評論以外の分野でも精力的な活動を展開している。最近、キノコ切手のコレクションをまとめた『世界のキノコ切手』（プチグラフィッシング）を刊行した。他に近著として『写真について話そう』（2003 角川書店）、『デジグラフィ』（2004 中央公論新社）、『危ない写真集246』（2005 ステュディオ・パラポリ カ）、『ジャパニーズ・フォトグラフィーズ』（2005 白水社）、『荒木本！1970-2005』（2006 美術出版社）などがある。

**南條 史生（なんじょう・ふみお）**

**森美術館館長**

1949年生まれ。東京都出身。慶應義塾大学経済学部、文学部哲学科美学美術史学専攻卒業。国際交流基金などを経て現職。これまでの主なプロジェ



クトとして、1997年ヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、ターナープライズ（英国）審査委員、2000年シドニー・ビエンナーレ国際選考委員、ハノーバー国際博覧会日本館展示専門家、2001年横浜トリエンナーレ2001アーティストック・ディレクター、第1回シンガポール・ビエンナーレ2006アーティストック・ディレクターなどを歴任。そのほかパブリックアート計画、コーポレートアート計画のコンサルタント、財団・基金などの選考委員、「アーティスト イン レジデンス」プロジェクトのアドバイザーとしても活動。2005年は第51回ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞審査員を務める。著書に『美術から都市へ～インディペンデントキュレーター15年の軌跡～』（1997 鹿島出版会）がある。2007年外務大臣表彰を受賞。

**森山 大道（もりやま・だいどう）**

**写真家**

1938年生まれ。大阪府出身。20歳で商業デザイナーとして独立した後、1960年岩宮武二氏のスタジオに入る。1961年細江英公氏に師事後、1964年フリー写真家となる。横須賀を撮った写真を1965年に「カメラ毎日」（当時）に持ち込み、その場で掲載が決まるなど、積極的に写真家活動を展開し、作品を発表してきた。海外でもバリのカルティエ財団現代美術館にて大規模な個展「MORIYAMA」（2003）を開催するなど、高い評価を受けている。主な写真集に『にっぽん劇場写真帖』（1968 室町書房）、『サン・ルゥへの手紙』（1990 河出書房新社）、『Daido-hysteric』（1993, 1994, 1997 ヒステリック・グラマー）、『犬の時間』（1995 作品社）など。また、1972年に発表された伝説的写真集『写真よさようなら』の復刻版（2006 パワーショベル）発行が大きな話題をよんだ。その他、エッセイ集『写真から／写真へ』（1995 青弓社）や、最近では作家へのさまざまな疑問に答えた『昼の学校 夜の学校』（1996 平凡社）が出版されている。

**榎本了彦（えのもと・りょういち）**

**アートディレクター、クリエイティブディレクター、プロデューサー**

1947年生まれ。東京都出身。武蔵野美術大学造形学部卒業。株式会社アタマトテ・インターナショナル代表。京都造形芸術大学教授・情報デザイン学科長。著書に『ダサイズムの逆襲』（1985 パルコ出版）、『アーバニズム宣言』（1990 TOTO出版）、『バッド・シティの快樂学』（1990 TOTO出版）、『アートウィルス』（1990 パルコ出版）、『御教訓大

語海』（1999 パルコ出版）『アーバナートメモリアル』（2000 パルコ出版）、『御教訓カレンダー』（1980-2007 パルコ出版）、『榎本了彦のアイデアノート・脳業手技』（2000 マドラ出版）などがある。1962年に二科展商業美術部門最年少（当時）入選。その後、1969年渋谷天井棧敷館のデザインを栗津潔氏と製作。1971年寺山修司監督作品「書を捨てよ町へ出よう」美術担当。天井棧敷ヨーロッパ公演美術監督。1974年月刊「ビックリハウス」（パルコ出版）を萩原朔美と創刊。以降、デザイン、編集、出版、文化イベント制作など、幅広く活動をしている。1980年より「日本グラフィック展」「オブジェクトKYO展」「URBANART」（パルコ）などを1999年までプロデュース。日比野克彦、タナカノリユキなど、多くの新人を輩出する。1989年に世界デザイン博で「住友館」、2001年にうつくしま未来博で「なぜだろうのミュージアム」（グッドデザイン賞受賞）、九州博覧祭で「TOTOミラクルマジック館」（北九州市長賞受賞）をプロデュース。最近では2007年に「黒川紀章キーワードライブ」（国立新美術館）を企画プロデュースするなど、積極的に活動をしている。

**具 本昌（クー・ボンチャン）**

**写真家**

1953年生まれ。韓国ソウル出身。1985年ドイツ ハンブルク国立造形美術大学（写真デザイン）修士位を取得し卒業。その後、韓国をはじめイギリス、ドイツなどで教授、研究員として活躍中。彼の作品はいつも時間の流れを扱っている。静溢で脆弱な瞬間を捉え、目には見えない生命の息を作品のなかに表現している。これまでにソウルの国際ギャラリー、ニューヨークのHasted & Huntギャラリー、パリのGalerie Camera Obscuraなどをはじめ、韓国、日本、ドイツ、フランス、デンマーク、アメリカなどで20回以上の個展を開催している。最近では、朝鮮王朝時代（1392-1910）の白磁の美しさをとらえ、写真に表現することに力を注いでいる。



坂本 陽「OUTBLUES」A3写真集 51点 インクジェットプリント

「閃光の様に過ぎていく/強い感情、儂い人生/残さずにいられない」

**榎本**「若い女性なのに、被写体との距離を詰めて飛び込んでいるところがすごい。相手に近寄るこのパワーがあれば、この先何でも撮れるのではないのでしょうか。被写体の面白さに引っ張ってもらっている部分も確かにありますが、作品の強度と本人の度胸を買いたくなります」



**大滝 功一郎「四次元キャプチャー」**
顔料インクジェットプリントによるポートフォリオ（サイズ356mmX279mm RCペーパー 20点）

「写真はイメージです」

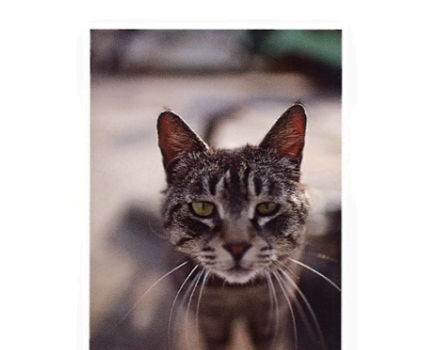
**具**「空間を平面的にとらえるというのは、世界的な流行なのかもしれません。ただ、この作品の場合は画面の中に、人の動きなどをうまく取り入れていて、そこが面白い。少し残念なのは、作品全体に統一性がなく、緊張感に欠ける部分がある点です」



松本 英明「Under elevated railway」写真集 23ページ

「たくさんの人達に作品を見て頂ける機会をいただいたことをうれしく思います」

**榎本**「人間が生活し終わってしまったような世界、という感じがしてきます。人がつましく生きている雰囲気が出ていて、記憶をそのまま取り出してきたかのよう。じっと見ていると寂しいんだけど、知らないうちに心が休まる気がしてくる写真です」



**栗山 昌之「港町ランデブー」**
リング綴じ A4 インクジェットプリント およそ170枚

「ああ、港町がすき/世界中の港町を撮り歩きたい酒場には荒くれ者の男達とすてきなママ/これはそのほんの序章です」

**具**「日常にあるものを違った角度や視点から眺める才能を持っている人なのだと思います。でも、強烈な写真があるかと思えば、そうでもない写真が混じっていたり。緊張が持続できていないようにも感じます。もう少し写真を選ぶ目を養い、育てていけるともっと良くなるのではないのでしょうか」



吉谷 慶太「i-source」A4ブックー冊 68点

「ありがとうございます。日々精進したいと思います」

**榎本**「小さい世界を優しく切り取ってきた写真です。近視眼的で、ピントが合っていないのですが、そこが良いと思います。フォーカスの合った日常を離れて、ぼんやりとしたうっとろしくない世界にふわふわと浮かんでいるような気持ち良さに浸れる作品ですね」



比良間 さゆり「甘い水」写真集(A4 インクジェットプリント)56点 28ページ

「バラバラのイメージの間を泳ぎ疲れ、存在の不安や解放を抱きつつ微妙に感じる光の中をゆっくりと沈んでゆく」

**比良間 さゆり「甘い水」**
写真集(A4 インクジェットプリント)56点 28ページ)

**具**「この写真は、触感に訴えかけてきます。思わず触ってみたいくなる衝動にかられますね。二つの写真を並べて見せる方法自体はそれほど新しいものではありませんが、この作品には独特の感性があって、見る側に「何か妙だな」という感じを与えてくれます。ブックとしての完成度も高く、統一感があります」

# Guest Judge Interview 1 榎本 了吉 インタビュー

2007年度（第30回公募）ゲスト審査員

インタビュー・文=渡部 千春

雑誌「ビックリハウス」や公募展の「日本グラフィック展」「アーバナー展」など、榎本 了吉氏が手掛けた企画の数々は70年代から90年代の文化を牽引する大きな存在となった。2000年以降も「東京コンペ」「カウパレード」「うつくしま未来博 なぜだろうのミュージアム」など、アートイベントや文化イベント、ダンス公演、カフェのプロデュース、書籍執筆、ウェブサイト運営など、ジャンル、表現方法、媒体を様々に変えながら文化を発信し続けている。榎本氏の目に写真はどのように映っているのだろうか。

## マルチな活躍の原点はタウン誌「ビックリハウス」

—榎本さんは雑誌の編集を手掛けたり、アートイベントをオーガナイズしたりと活動が非常に多岐にわたっていらっしゃいますが、肩書きはどのようにされているのですか？

—応クリエイティブ・ディレクターでしょうか。そうなるつもりではなかったんですけど、いつの間にかそうなってしまいました。子供時代は絵と文章が好きで子だったんですね。グラフィック・デザインを勉強していたので、ひとまずデザインをやっていくことになるのだらうと思っていたら、栗津 潔さんや寺山 修司さんのような影響力の強い人たちに出会って雑誌を始め、そこからいろんな仕事が増え広がっていったんですね。僕の仕事もデザイナー、編集者、クリエイティブ・ディレクター、プロデューサー、と広がっていきました。こうした仕事をずっと並行してやってきています。

—何かを作ってメディアを通して世に出すという点では変わっていないですね。

—自分の中ではデザインも編集も、プロデュースもクリエイティブ・ディレクションも違いがあるとはあまり考えていません。最後に現れてくるのが少し違うだけで、一緒の作業だと思っています。

—コンペの審査もまた、そういった活動の一つなのでしょうが？

—その話をするにはやっぱり雑誌「ビックリハウス」から始まることになりそうですね。

—榎本さんと萩原 朝美さんが立ち上げたとお聞きましたが、そもそもどのような経緯で始まったのですか？

—1974年のことなんですけど、僕は1年間のパリ生活から帰ってきたところ、萩原は半年くらいアメリカに国務省の招聘で行って帰ってきた。2人とも25才から26才になる頃だった。やることもなくて、うろうろしていてもしょうがないから一緒に何かやろうということになって、最初、アートの情報誌を作りたいと考えて出版社を探していました。ちょうどパルコが出版事業を少しずつ始めた頃だったので、企画を持ち込んだら、アート情報誌はできないけれどタウン誌を作る予定があるからやらないか、と逆に言われて「ビックリハウス」が始まったんです。

—タウン誌だったのですか？

—そうですね。公園通りにあるパルコは渋谷の駅から900メートル離れている。そこまでお客様を引っ張ってくるために、渋谷の街を紹介する面白い雑

誌を作ってみなさい、と言われて100万円をもらいました。74年当時でも100万円で一冊というのは、自分たちの編集費も出ないくらいぎりぎりの予算。原稿料がないから読者投稿を始めたのですが、それが当たって半年後には投稿のスタイルもできてきた。更にパロディが始まる。雑誌「アンアン」のパロディで「ワンワン」という特集をやったら、これが大受けしました。もし「アンアン」の出版社・平凡出版 — 今のマガジンハウスですけど — から文句言われたら、謝って辞めちゃうと、と2人で言っていたんだけど、その平凡出版からは「結構やるじゃん」なんて言われてしまった。そこでいい気になって、本格的にパロディと投稿のページをスタートさせたんです。

—雑誌からコンペにはどう繋がっていくのですか？

—「ビックリハウス」の誌面の、パロディの部分だけを拡大して展覧会にしたのが「JPC展（日本パロディ展）」です。そこには、パロディのコンペでありながらレベルの高いイラストレーションの作品が集まって、みんなグラフィック表現がすごくうまい。それで1980年に「日本グラフィック展」を作ることになるんです。日比野 克彦君は、その3回目で大賞を取っています。彼はその当時からスター性がある人で、日比野君が出たことで一気に応募の人数が増えました。

—日比野君は段ボールで作っていたから、作品形態に厚みがある。「出っ張る子（パルコ）」と僕たちは呼んでいましたけど、他にもそういう「出っ張る子」が出てきて、出っ張っているのはグラフィックとは言えないんじゃないか、ということで、今度は84年に「日本オブジェ展」、後の「オブジェTOKYO展」をスタートさせました。それから、グラフィックとオブジェ、二つの表現形式だけで分けるのはおかしい、と、92年に「アーバナー展」へと発展していったわけです。「アーバナー」は1999年に終わって、少し時間をおいてから「東京コンペ」を3年やりました。ですからこの25、6年間は、ずっとコンペの仕事をしてきたことになりそうですね。

## 求められていた新しい表現発表の場

—「日本グラフィック展」「アーバナー展」とも美大生や若手アーティスト



「ビックリハウス」創刊号



「ビックリハウス」1977年2月号

# 「日本グラフィック展」

雑誌ビックリハウスの投稿ページから発展したグラフィック表現のコンペティション展。1980年にスタートし、12年間にわたり1991年まで開催された。



第3回 審査風景 1982年



第6回展示会場 1985年



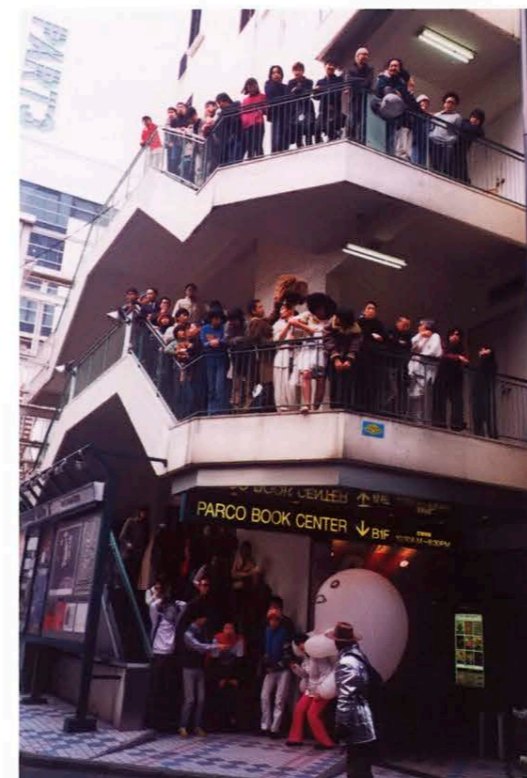
第6回 トークイベント 1985年



第7回 審査風景

# 「アーバナー展」

「日本グラフィック展」を引き継ぐかたちで1992年にスタートした、アート表現全般を対象としたコンペティション。1999年第8回まで開催された。



アーバナー・メモリアル 参加アーティスト集合写真 1999年



横山 豊岡パフォーマンス風景 1997年



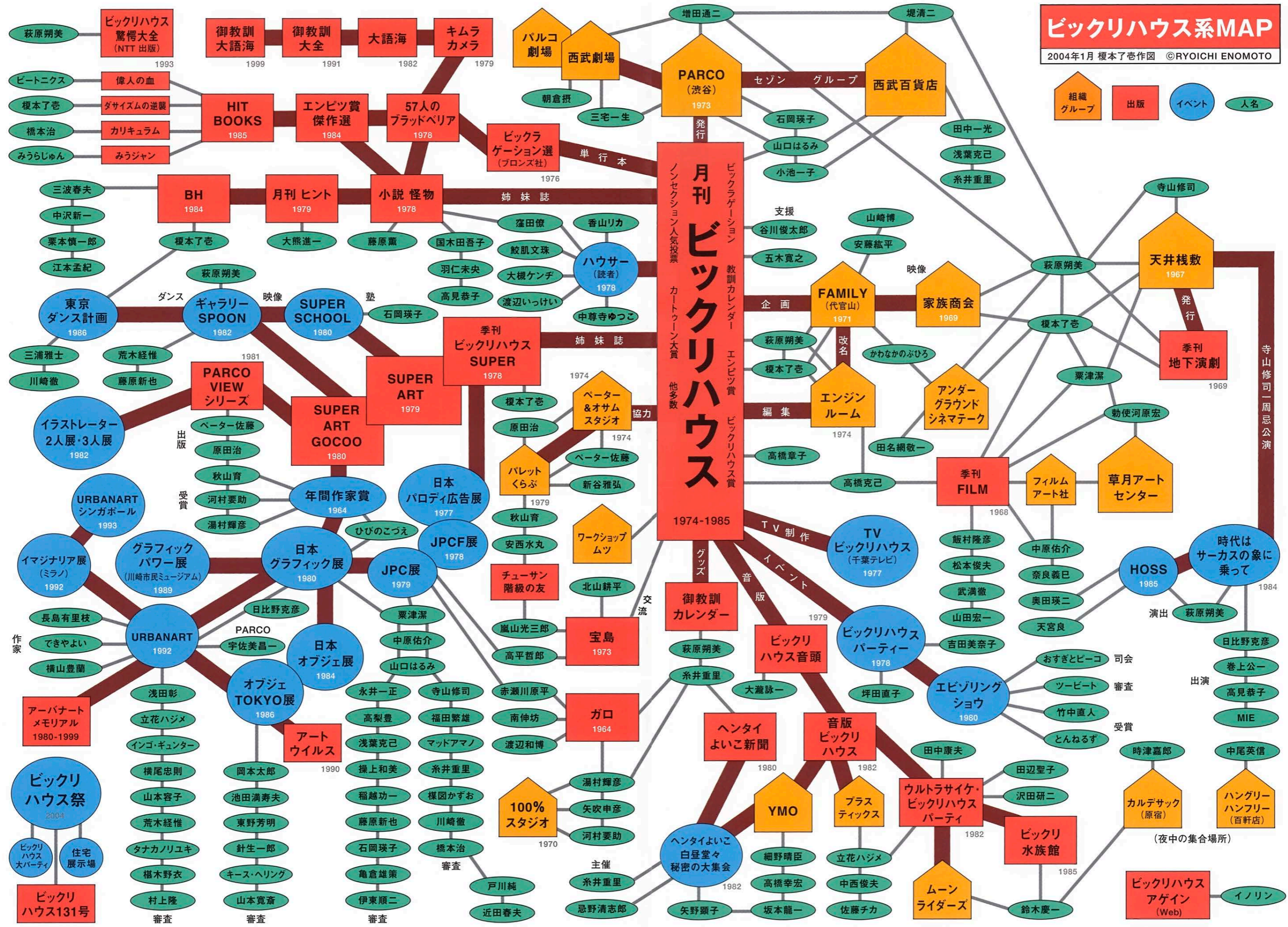
アーバナー・メモリアル オープニング風景 左はできやよい氏 1999年



第1回カタログ

# ビックリハウス系MAP

2004年1月 榎本了彦作図 © RYOICHI ENOMOTO



雑誌ビックリハウスから派生していった様々な文化活動や参加者たちをまとめた見取り図を榎本氏自らが作成。  
 ビックリハウスの歴史をまとめた企画本『ビックリハウス 131号』（パルコエンタテインメント事業局刊 2004年）に掲載。

トに大きな影響力を持っていましたが、当時の熱気も相当なものだったのではないでしょうか？

一番多い時で7000点近いエントリーがありましたからね。「日本グラフィック展」がうまくいった一つの理由は、「日宣美（日本宣伝美術協会）展」が終わって10年経っていたからだだと思います。日宣美は石岡 瑛子さんから浅葉克己さん、松永 真さん、田中 一光さん、横尾 忠則さんや粟津 潔さんといった、グラフィックデザイナーの大御所が全員賞を取ってるんです。それが69年に粉碎されてしまったので、70年代はデザイン系の先進的な人材を発掘するチャンスがなかった。そういうところに現れた、というのが一つ。

—他の理由というのは？

ある種デザインの時代が終わって、ニューペインティングというのが世界中から出てきた時代だったからでもありますね。ジュリアン・シュナーベル、デヴィッド・サーレとかエンツォ・クッキとか、閉塞状態だった現代美術の中でドローイングで表現する新しい作家が出てきた。「日本グラフィック展」という名称で始めましたが、パブリックなグラフィックデザインではなくて、もっと個人的なモチーフを描きたいと思う若い人たちが、油絵や日本画ではない新しい表現で作品を出してきました。

—バルコというブランドネームも大きかったですか？

ちょうどその頃バルコが全国展開で北海道から九州までお店が広がっていく時期で、日本中のバルコで募集をかけてくれた。普通のコンペだったら展示は1~2週間やって終わりですけど、「日本グラフィック展」や「アーバナート展」では発表の後1年間、審査員や受賞者のトークショーをやりながら、全国を巡業していた。だから「日本グラフィック展」というのは東京だけの出来事ではなくて全国的な活動で、草の根のように若者達のエントリーしたい気持ちを持ち上げていったんですね。こんな風にならなければならぬ要因があって、あれほど大きなコンペになっていったと思うんです。

—賞を設けるだけでなく、若いクリエイターたちを成長させてもいる。

過去の記録に出てくる名前を見ると、大竹 伸朗さん、ひびのこづえさん、谷田 一郎さん、寺門 孝之さん、谷口 広樹さんなどがいます。会田 誠さんは少女の髪の毛を分けてあげ道が繋がっている有名な作品を出していたんですよ。他にもバルコ 木下さん、伊藤 桂司さん、秋山 具義さん、平野 敬子さん、長島 有里枝さんに、できやよいさん……。

—今活躍されている方が、軒並み応募していますね。

受賞した人はみんな、それからすごい仕事をしています。日比野君だけじゃなくて、タナカノリユキさんも受賞してそれからずっと活躍しているでしょう。変わったところでは、『狂気の桜』の原作者ヒキタクニオさんもアート作品を出していたりもしました。

—後に活動する人というのは初対面で、おっ、と分かるものでしょうか？

やっぱり自分がやっていることに自信がある。すごくポジティブで、迷ってなくて、楽しんでやっています。ビジュアル表現を見る時は、瞬間的に幾つものポイントをチェックしている。色彩的に良いか、構造力や物語性があるか、歴史性があればそれは何なのか、その中にあるものを読み取ろうとしている。ただ、有無を言わせず一瞬ですごいと思わせる作品に出会うこともありますね。

写真家たちが目指す新たなステージとは？

—今回の写真新世紀の審査では、どういうところに基準を置いて見られたのですか？

コレクターが付くような作品を探しました。今、写真は確実にアートの一分野になっている。日本では杉本 博司さんのような作家が象徴的だと思いますが、アートの境域の中で写真表現がすごく評価される時代になってきていますよね。そういう世界で取り引きされていく、そんな能力を持った人がいないかと思いついていました。

—海外では写真をメディアにした現代アートが地位を確立していて、スター作家もいる。これに日本がどれだけ追いついて行けるか、榎本さんご自身もかなり関心があるわけですね。

プリンティングアートにしるビデオにしる芸術として定着していくわけだから、写真もそういう風に広がらざるをえないと思います。これまで写真の評価というのは、画質や、構成力、写されている被写体が良いといったフォト・ドキュメンタリーが主流だったと思いますけど、今はフォトグラフィ・アートという時代になっているし、プリント作品一枚で数千万円から、1億、2億という値段がつく写真だって出てきています。そういうアートマーケットの中で生き残っていけるような表現者かどうか、そういう意味でのスターになれる才能かどうかということには、当然興味がありますよね。

—これまで日本の写真家は写真集を出すことが評価の基準としてあったと思うのですが、これも変わってきているということでしょうか？

昔からテーブルブックと言って、画集や写真集は持っている人の文化度を表すバロメーターのようなところがあった。例えば家のテーブルなんかに置いてあって、友人が訪ねてくればその本について話す、文化的な話をしていく、というコミュニケーションがあったわけですね。今は、本ではなく、絵画や写真作品そのものが壁に飾ってあって、その作品について語る時代になっているんです。世界中そういう風に動いているのに、日本だけは依然として書籍の中に閉じこもっている感がありますね。コマーシャルを撮る、ファッション写真を撮る、ドキュメンタリーを撮るといったことは、これからはずっと写真家の仕事として重要だし、本質だろうけれども、それよりはるかに強いニーズとして、アーティストとしての写真家が世界中から待望されているんじゃないでしょうか。日本の写真家は世界からは絶対狙われると思いますよ。そもそも日本はカメラ王国ですからね。ただ、世界に出て行くためには、ギャラリーや美術館がかなりバックアップしないとダメですね。マネージメントをしよう、若手を買おうという人は増えてきています。写真表現をする人もそういう意識を持っていかないと、日本はますます遅れちゃうんじゃないかな。

—これからの写真家は、作品としての見せ方やコンセプトを考えていくことや、アートのジャンル、コンテンポラリーのジャンルで評価されているもの、話題になっているものを見て、写真の表現にもそういうステージがあるということを知る必要があるのですね。

現実としてそういう時代が始まっているので、日本人の表現者が大量にそこに参戦して欲しい。アートの領域で写真表現をするスターが出てくると、日本の写真界は大きく変わると思います。

## 「東京コンペ」

「for dreaming future artists」をキーワードに、ビジュアルアート、ダンス&パフォーミングアート等広い領域からの才能発掘を目指すコンペティション。また、様々なジャンルの表現者たちの参画を募り「コトバの復権、コトバの力」の展示とメッセージを展開する「コトバメッセ」とともに、2004年から年一回開催されている。



第1回 ポスター 2004年 AD=秋山 具義



第2回 審査風景 2005年



第2回 展示会場 2005年



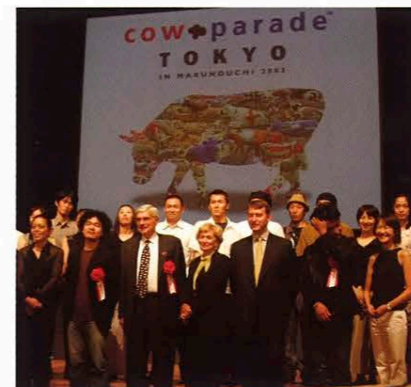
第2回 ダンスバザール大賞「おことクラヴ」



第1回 コトバメッセ 2004年

## 「カウパレード東京」

実物大のグラスファイバー製の牛に、様々なペインティングや造形を施し街中に展示するパブリックアートの祭典。スイスのチューリッヒに始まり、現在ではニューヨークをはじめ世界中の街で開催されているこのイベントが、東京では榎本 了彦氏のプロデュースにより、丸の内を開催場所として2003年にスタート、2006年にも開催された。



第1回 カウパレード・オープニングセレモニー 2003年



第1回 屋外展示風景（東京・丸の内）2003年



第1回 屋外展示風景（東京・丸の内）2003年

# Guest Judge Interview 2 具本昌 インタビュー

2007年度（第30回公募）ゲスト審査員

具本昌（クー・ボンチャン）氏は今日の韓国を代表する写真家のひとりであり、瞑想的な静けさを醸し出すその作品は日本にもファンが多い。すでに世界各地で数多くの個展やグループ展を開催しており、教育者や展覧会のキュレーターとしても韓国写真の発展に大きく貢献してきた。最近では朝鮮王朝時代の白磁をテーマに作品を制作しているという具氏に、写真家として活躍するようになるまでの経緯や大切な出会い、写真への思いをたずねた。

## 韓国を代表する写真家のスタートは挫折から

—実は具さんは大学で経営学を専攻し、会社勤めをされた後、1979年にドイツへ留学して写真を学ばれたそうですね。どうやって美術や写真と出会ったのですか？

僕は小さな頃から、自分で何かを作ったり、描いたり、見ることにとても関心がありました。ですから小学校の頃からずっと美術が趣味ではあったんです。しかし周囲の理解がなかなか得られませんでした。特に僕の両親は、美術大学に行くことにものすごく反対しました。“美大に行ったらお金も稼げないし、そもそも男たるもの……”という感じで。韓国が儒教の影響の強い国であることも、少なからず影響していると思います。両親は僕のそうした繊細な面を好みませんでしたから、僕自身も家庭の中ではそういう面を敢えて見せないようにしていたんです。そうやって僕は自分をごまかしながら、一応大学を出て、就職もしたわけです。ところが結局一年も経たないうちに、やはりここは僕がいる場所じゃないと気づいてしまった。自分自身に嘘をついていたんだと。だからその頃は本当に息が詰まりそうでした。その意味で、ドイツへ行ったことは僕にとって現実逃避でもあり、また突破口でもありました。ドイツへ行った当時、僕は26歳でしたが、その頃の韓国ではその年齢の人であれば就職してそれなりの職場で働き、そして結婚して子供を持つという、ステレオタイプな生き方というものがあらかじめ用意されていました。それに対する周囲の期待もすごく強かった。でも僕は自分がやりたいことをやってみたくて、そもそも外国人の人はどうやって暮らしているんだろうと興味があって、それを確かめたかったというのもあるんです。

ドイツを選んだのは、当時アメリカはお金がかかりすぎるということもありました。しかし、実は僕の兄はアメリカ留学をしているんですね（笑）。僕は次男ということもあり、留学したいと父親に申し出たらそんなお金はないと言われてしまった。やはり韓国では長男がすごく大事なんです。そしてドイツへ行ってからは、昼間は職場で仕事をして、夜間に学校へ通いました。そこで初めて、自分にも繊細なものの方や才能があるんだということをはっきり自覚することができました。

—ただ美術を学ぶためであれば、韓国の学校へ通うという選択もあつたのではないかと思います。やはり韓国の外に出ることが重要だったのでしょうか？

そうですね。ただ当時、僕はまだ写真をやろうと決めていたわけではなかったんです。確かに韓国ではソウル大学の美術学部などには優秀な学生が集まっていますが、そこはあくまでも英才教育を受けた人達が入る学校であつて、僕はそういう準備は全くしていませんでした。それよりも、そういうステレオタイプの、敷かれたレールの上を歩くような生き方から脱出したかった。そして自分にとっての新しい環境を作り出したかったわけです。

インタビュー・文＝竹内 万里子  
通訳＝尹 春江

## 風景やモノと会話をする才能

—実際海外へ行かれていかがでしたか？

一言でいって本当に幸せでした。街に一步出れば、ポスターや雑誌、ショーウィンドウに飾られている商品、すべてのものが新鮮に目に映りました。僕がやりたかったのはこれだ、まさにこういうことがやりたかったんだと思いました。自分がやりたいことが日常生活の中に見つけられたんです。それがとても良かったですね。

—抑圧的な環境から海外へ行ったときに感じられる幸せというのは、ある意味では「ひとりであること」の幸せだといえるかもしれません。実際、具さんの作品にはどこか、「ひとりであること」をつねづね感じさせられます。

僕が幸せを感じられたことには、おそらく2つの意味があったと思います。ひとつは、僕はそこで一度生まれ変わったということです。新しい人間、ひとりの人間として。過去の重しをすべて取り除いて、新しく出発できたということがすごく良かった。それまでは好きなことをできなかったということもあって、とても内向的で自分に自信がなかったのが、ドイツに来て初めて自分に自信が持てたんです。もうひとつは、作品にも関わってくるんですが、繊細なものを見る目だとか、自分の感覚が、どこか人と違っていることをはっきりと自覚できたということですね。それは恥ずかしいことなんかじゃない、自分にとって良いことだと思えたんです。

—ドイツではまずどのようにして作品制作に取り組みられたのでしょうか？

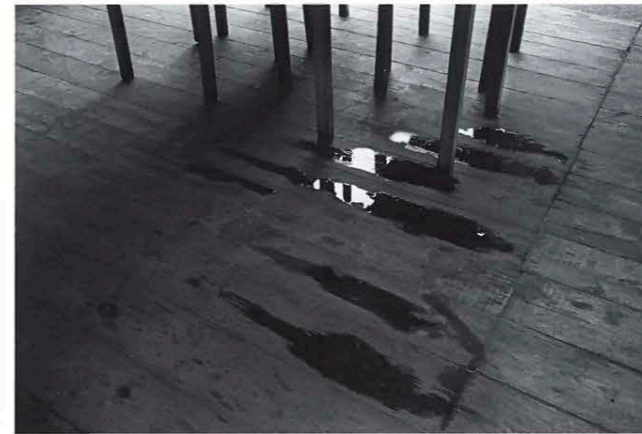
具体的にいうのはなかなか難しいのですが、ドイツへ着いた頃はひとりで過ごす時間がなにしる楽しくて、週末になるとカメラを片手にいろんな所へ行き、いろんなものを撮影しました。その頃の僕の友達はカメラだったんです。そしてカメラを通して被写体のモノと会話をするというのが、最初の取り組みだったと言えると思います。もともと幼い頃からひとりでいる時間が多かったせいか、僕にはいち早く風景だとか人の顔やモノと会話をする才能が、少しはあつたように思います。

—学校では、そういう具さんを認めてくれた先生や友人との出会いもあつたのでしょうか？

学校のカリキュラムは写真というよりもどちらかというと絵画が中心だったんです。でも絵画の先生が僕の絵を高く評価してくれて、いろんなことを教えてくれました。逆に学校で写真を教えられたという感じはあまりありませんでした。

—絵画ということであれば、具さんの写真の独特の静謐さというのは、イタリアの画家ジョルジョ・モランディの作品世界と通じるものがあるようにも思います。

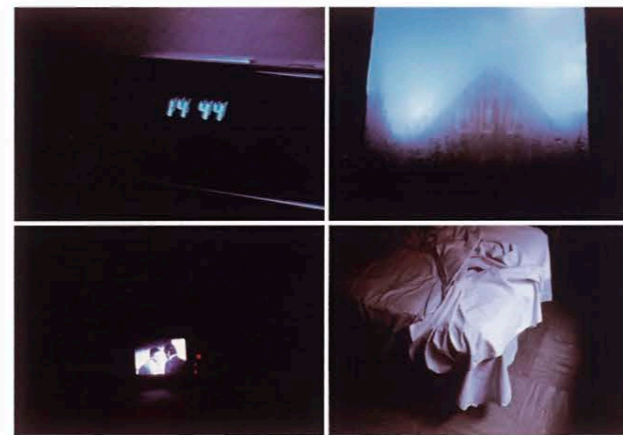
僕もモランディは大好きです（笑）。写真家でいえばウジェーヌ・アジェ（※1）、ヨゼフ・ステック（※2）などの作品を見ると、たとえ国や時代が違っていても、自分と同じような感覚を持った人達がいたんだと、たくさん勇気をもらえますね。森山 大道さんの写真も、ドイツにいたときに展覧会のカタログで初めて見たんですが、実際に会ったこともなく言葉も通じないけれど、あつ、この人も寂しがり屋なのかな、という印象を受けました（笑）。写真だけを見るとワイルドで強い印象もありますが、彼の内面は写真とは違ってとても孤独なのではないかと感じたんです。



Early Europe B/W V, 1983



Early Europe B/W II, 1982



A One Minute Monologue, 1980-1985



Early Europe Color, Pisa, Italy, 1984



Early Europe Color, Rome, Italy, 1983

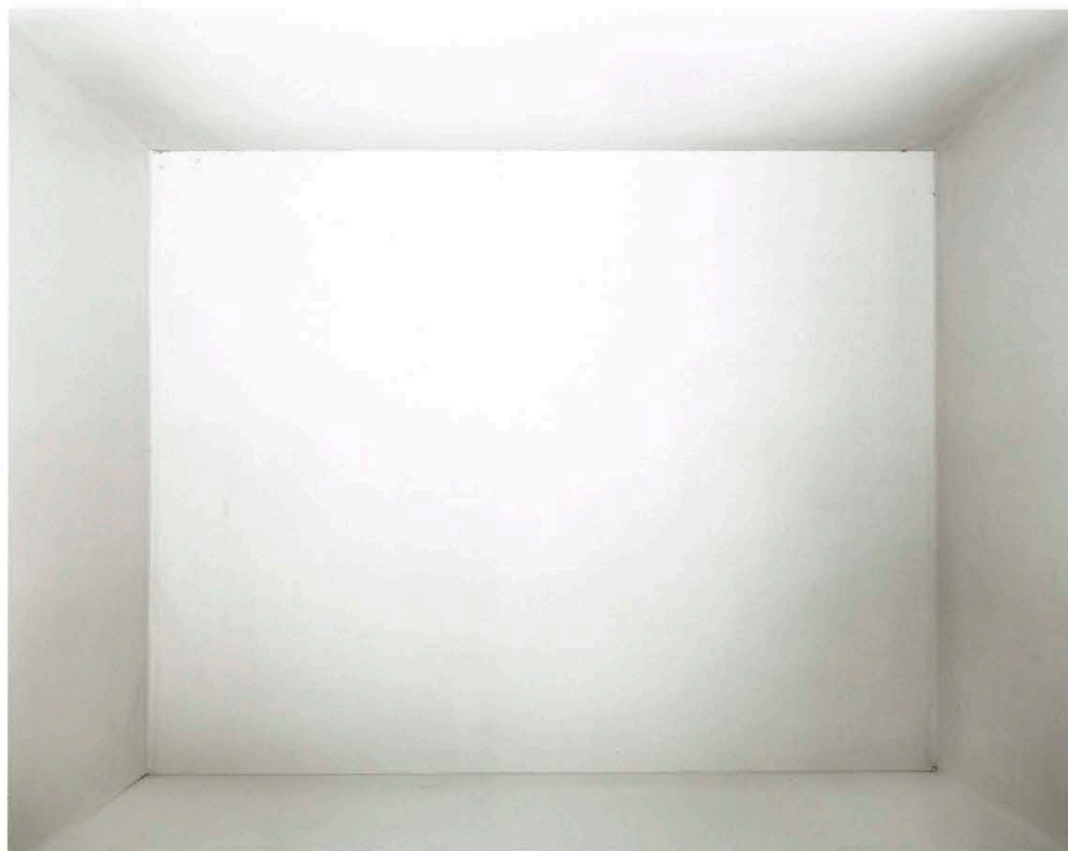




内部 VI、2003



自然の素描 IV、2000



内部 X、2004



時間の肖像 I、1998



仮面（麗山五廣大）、2002



息 VI、1995



Vessel / Collection of Leeum, Samsung Museum of Art、2006

## 韓国人写真家としてのアイデンティティ

—そうやって絵と写真を同時に実践していく中で、写真へとシフトしていくきっかけのようなものはあったのでしょうか？

僕は写真が持つ特性というものに惹かれたのではないかと思います。絵は長い時間を費やして、いろんなことを頭で考えながら作っていくものです。それに対して写真はすぐに自分のものになりますし、すぐに発表できる。そこに大変魅力を感じました。

そこで学校の卒業直前に、勇気を出して、とても尊敬していた大好きな写真家に電話をしたんです。アンドレ・ゲルブケ（※3）という写真家でした。そして実際に会って作品を見てもらい、こう言われたんです。「君の写真はとても良いけれど、これを見ても韓国からドイツに来た人が撮ったものだということはわからない。韓国人のアイデンティティが感じられない」と。その言葉は、僕にとってはすごく嬉しくて、むしろ衝撃でもあり、それ以降ずっと親しく付き合っています。そうやって正直に感想を言ってもらえたことがなにより嬉しかったし、そういう人達との交流が、僕を少しずつ成長させていったのだと思います。

—アイデンティティを感じられないというゲルブケさんの言葉は、どういう意味で衝撃だったのでしょうか？

当時の僕は、完成された美ばかりを追求していたんです。ロバート・フランク（※4）やアンリ・カルティエ＝ブレッソン（※5）のような写真家を目指して、彼らのような写真を撮りたい、とただ思っていました。ですからゲルブケさんに見せたのは、そういう写真だったんです。そこには僕の気持ちや、僕自身が見て感じたものというのあまり反映されていなかったと思います。しかし彼と出会って、感情や深い意味を写真に込めることの大切さを実感しました。そこでいわゆる日カット、つまり自分が捨てようと思っていた写真や、失敗だと思っていた写真の中から、僕が本能的に撮ったようなものを、もう一度自分のネガから拾い集めて作品を作りました。

—そして80年代半ばに帰国されるわけですが、ちょうどその頃は、具さんだけではなく海外で勉強した若い写真家達、いわゆる留学組の第一世代が韓国に戻ってきた時期でもありましたね。当時の韓国における写真の状況は、具さんの目にどのように写りましたか？

韓国で起こる日々の出来事には、ひどく失望しました。自分に刺激を与えてくれる人も少なかった。しかし、おっしゃるようにちょうどその頃、他にも何人かの若手写真家が外国から戻ってきていたので、ここでその人達と一緒に何かができるんじゃないかというわずかな希望を持つことができました。

実際、ヨーロッパにはギャラリーや美術館がたくさんありましたが、当時の韓国にはそういう空間が一つか二つしかありませんでした。そこで僕があつたらいいと思うものを韓国で作ってみようと思つて積極的に動いたり、彼らとグループ展をやったりしました。僕はもともと消極的で内向的な性格なんですけど、なぜか写真に関しては勇気が出たり、欲が出てしまうんです（笑）。

## 声なき声を伝えること

—今日に至るまで作品を作るにあつたって一番大事にしていることは何ですか？

静物なり対象が何を言おうとしているのか、ということですね。僕はそれを聞いて、第三者にきちんと伝えるということをして、いつも心掛けています。その対象というのは、それこそ壁であつたりもするんですが、それは確かに日常生活においてはあまりにもありふれたもので、誰もその声など聞こうとはしません。でも僕はどんな小さな声でも良いからそれを聞き出して、第三

者に伝えたい。それが非常に大切なことだと思っています。最近はその対象が伝統的な仮面であつたり、白磁であつたりするわけです。

—最後に、写真家を目指す日本の皆さんにメッセージをいただけませんか。

僕の写真は、声なき声を伝えようとする作品だと思います。もちろん、そうではない写真も大好きですし、いろんなジャンルにも興味があります。しかし、いずれにせよ、写真によって自分が何かを伝えようとするとき、自分がこれだと思う“声”をきちんと伝えられるようになること、それを目指して写真を追求されてはいいかでしょうか。もちろん、それは短い間でできることではありません。僕自身もまだ続けているんです。作品は長い時間をかけてこそ作り上げられるものなのですから、是非頑張って続けてほしいと思います。

※1：ウジェーヌ・アジエ

写真家。1857年フランス・ボルドー近郊生まれ。船乗りや役者を経て、1890年代から「画家のための資料」としてパリやその近郊を撮影。生前はほぼ無名だったが、1927年にパリで他界後、世界的に高い評価を得るようになり、今も多くの写真家に影響を与えている。

※2：ヨゼフ・ステック

写真家。1896年チェコ・コリン生まれ。第一次大戦に従軍し右腕を負傷。1920年代から写真家として活動を開始し、チェコ写真協会の創設メンバーとなる。光への感受性に満ちたその静謐な写真によって「プラハの詩人」とも称される。1976年プラハにて他界。

※3：アンドレ・ゲルブケ

写真家。1947年ドイツ・ギフホルン生まれ。otto・シュタイナートのもとで写真を学んだ後、フォトジャーナリストとして活動を開始。70年代後半から作品制作に専念し、人間の孤独を物語るその作品は80年代にかけてドイツの若い写真家たちに大きな影響を与えた。

※4：ロバート・フランク

写真家。1924年スイス・チューリヒ生まれ。1947年アメリカに移住。1950年代に全米各地を撮影した写真集『アメリカ人』は現代写真の金字塔として名高い（1958年フランス、翌年アメリカにて出版）。その後は16ミリ映画の製作に専念。主な写真集に『ラインズ・オブ・マイ・ハンド』（1972）など。

※5：アンリ・カルティエ＝ブレッソン

写真家。1908年フランス・シャントルーに生まれる。1947年キャバラと共にマグナム・フォトを創設。名機ライカを縦横無尽に駆使し、1952年に初の写真集を英仏同時出版。その英語版タイトル『決定的瞬間』を通して、一躍世界的な名声を得る。2004年南仏プロヴァンスにて他界。



グッバイ・パラダイス II 蝶、1993

「laboratory1:」



# Portfolio Interview 1

## 高木 こずえ インタビュー

2006年度（第29回公募）グランプリ

インタビュー・文=山内 宏泰



一枚のポートレートの左右半分ずつを使って、二つの人物像を生み出す。インパクト抜群の作品「insider」でグランプリを獲得してから1年。個展のために用意された新作は、前作と大きく雰囲気異なるものの、見る側の目を引き付ける強烈さは変わらない。

### 創作のヒントはアインシュタインの言葉から

—「laboratory1」と名付けられた新作は、どんな内容のものですか？

一番長いもので横12センチ、縦240センチの細長い作品を、東京の会場では40数点展示する予定です。なぜこんな形の作品なのか、言葉で表そうとすると難しい話になってしまいそうですが、説明すると、写真を縦に引き伸ばしたのは重力の感覚を視覚的に増大させたかったからなんです。それによって、写っている物事は、意味として「見られる」ことから解放されます。すると、写真から時間と空間そのものを感じ取れるようになるんじゃないか。そう思って作ったものです。

—どのような経緯で生まれた作品ですか？

個展のために新しいものを作ろうというのは心に決めていて、でも最初は完成形が頭に浮かびませんでした。そこでまずは、スナップ写真を撮っていききました。とにかく撮影を続けていって、自分が今、本当に興味のあるものを見つけていけばいいと思って。スナップをブックにまとめたりしていたんですけど、そういう作業をしているときに気づいたんです。私は写真を撮ったり選んだりするときに、そこに写っている状況やものごとに対して特別な興味を持っているわけじゃない。もっとそれ以外の、直接は目に見えないものが気になっているんだと。

—写っているものとは違う、目に見えないものとは、どんなものなのでしょう？

写真の中の空間の広がり方とか、時間とか、何か大きな力のようなものとか。自分が撮った写真を見ながら、どうやら私はそういうものを感じてみたいんです。でも、普通、他の人は写っているものそれ自体が目に行くから、そんなことを意識してはいないでしょう。これを表現するにはどうしたらいいかなと考えながら、試行錯誤する時期が続きました。

あるとき、パソコンに取り込んだ画像の縦横比率を、何気なく変えてみたことがありました。縦に引き伸ばした画像では、自分が写真の中で見たいと思っていたものがぐっと前に出てきました。そうか、この形で作品にしていけばいいと気づいて、作品のフォーマットが決まりました。その時点で、1年間の制作期間の半分以上が過ぎていましたから、けっこうギリギリでアイデアが固まりました。間に合ってよかったです（笑）。

形が見えてきたので考えを整理してみると、私の写真のキーワードは「重力」と「時間」と「空間」であることが分かりました。それで、この三つの言葉をウェブで検索してみると、アインシュタインの相対性理論についての内容が山ほど出てきた。前から気になっていた人物でもあったので、入門書を何冊か読んでちょっと勉強してみました。すると、重力とは時間と空間のゆがみであるということが書いてある。ということは、写真の縦横比率を変えて重力を感じさせれば、時間と空間を感じることもつながるかなと思いました。それに、画面を引き伸ばすと、写っているものが何かがわからなくなるので、見えないものを感じるしかなくなる。この引き伸ばした形でこそ、私が考えていることをうまく伝えられるんじゃないかとも思いました。言ってみれば、アインシュタインが作品の形を決める後押しをしてくれたんですね。

### 写真を使って「なぞ」を探る

—グランプリ受賞一年後の写真新世紀東京展参加が初の個展ということになります。

そうです、うれしいです。これからどんどん展示という形で作品を発表していきたいとは思っていますが、なかなかこんな大きな会場が使えることはないでしょう。だから今回は、できるだけいろんなことに挑戦してみました。作品のサイズをかなり大きくしましたし、展示をひとつの空間としても感じてほしかったので、東京展では床面に、壁と同じ白いマットを敷きます。

作品の並べ方は、随分悩みました。でも、ああでもないこうでもないでずっと考えていると、それぞれの作品同士につながりのようなものを感じ、隣り合うべきものやひとかたまりとなるべき

作品が見つかっていきました。各地で開かれる巡回展では、会場によって作品レイアウトを変えていきますので、それも楽しみです。

—「laboratory1」というタイトルに込めた意味は？

展示空間が、私にとってまさに「実験室」だったので、こういうタイトルを付けました。私は作品を通して何かを強く主張するというよりも、写真を使って探しものをしたり発見することをしていっているつもりです。私の中に芽生えた「なぞ」みたいなものを探っている感じとか。いつも、何かを知りたいと思いつつながら、写真を撮ったり見たりしていますね。

今回は展示自体もひとつの実験だと考えているので、展示してみても初めて分かる事や予想外の結果もあるかもしれないと思っています。

—グランプリを受賞した前作「insider」とは、随分趣が違う作品になりました。

「insider」の続編で展示を構成しようということとは、全く考えませんでした。あの作品でやろうとした「なぞ解き」は、私の中ではもう終わったので。今回、確かに見た目はかなり違うものになりましたけど、二つの作品はけっこう似ていると私には思えます。作品化していくうえでの思考の仕方とか、好奇心の持ち方は同じです。まずは自分が撮ったストレートな写真を出発点にして、それを自分の内面に照らしながら加工して、新しい形を与えていくという手順も同じ。結果としてアウトプットされる形はいろいろでしょうけれど、このやり方は当分変わらないかもしれません。撮ったものをそのまま提示するより、自分の内側をくぐらせた方が、私にとっては「本当っぽい」作品になる。そんな気がしているんです。



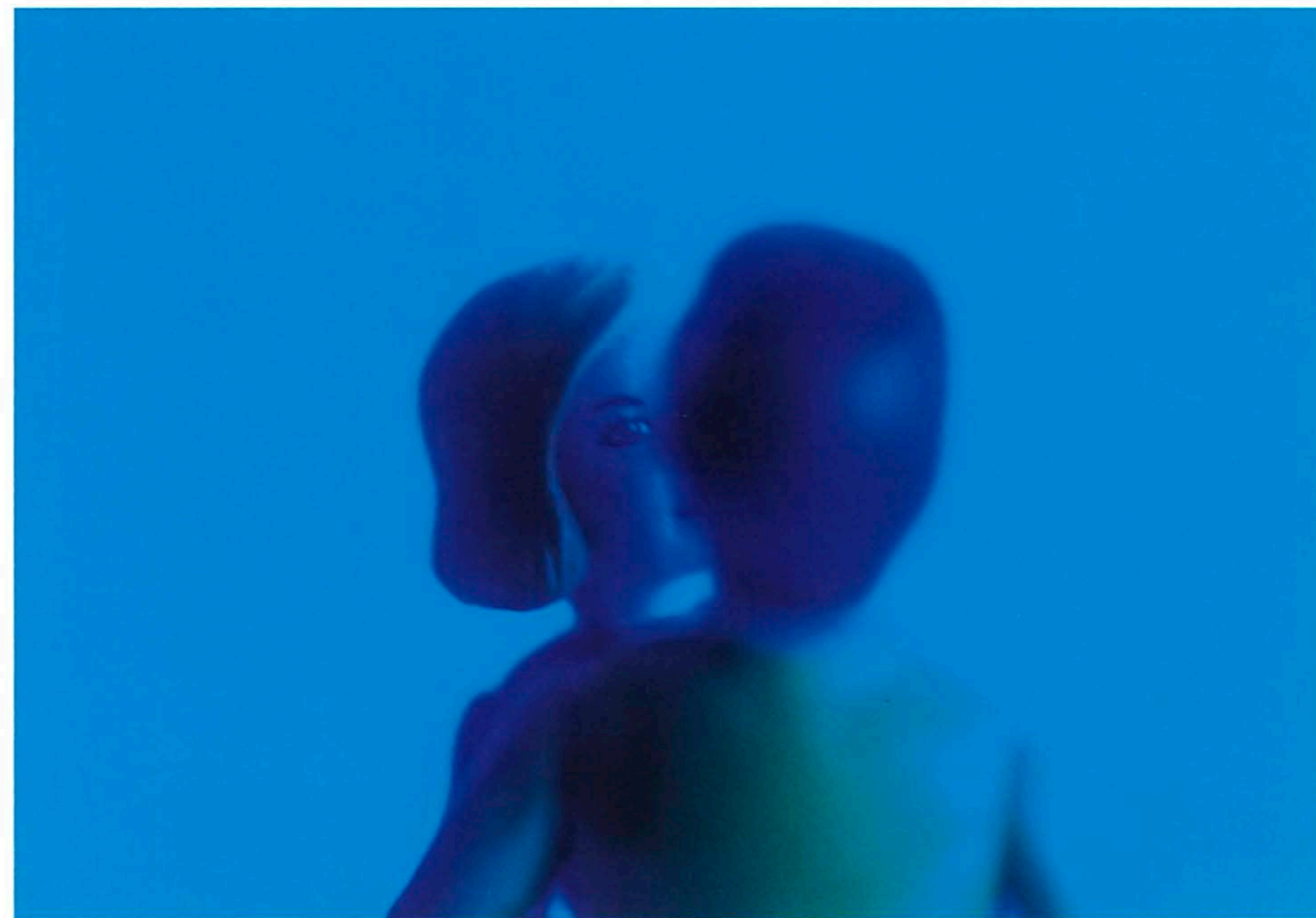
### Profile

高木 こずえ（たかぎ・こずえ）  
1985年 長野県生まれ  
2006年 写真新世紀第29回公募グランプリ、カラーイメージングコンテスト準グランプリ  
2007年 東京工芸大学芸術学部写真学科卒業  
現在、フリーランス・アーティストとして活動中。

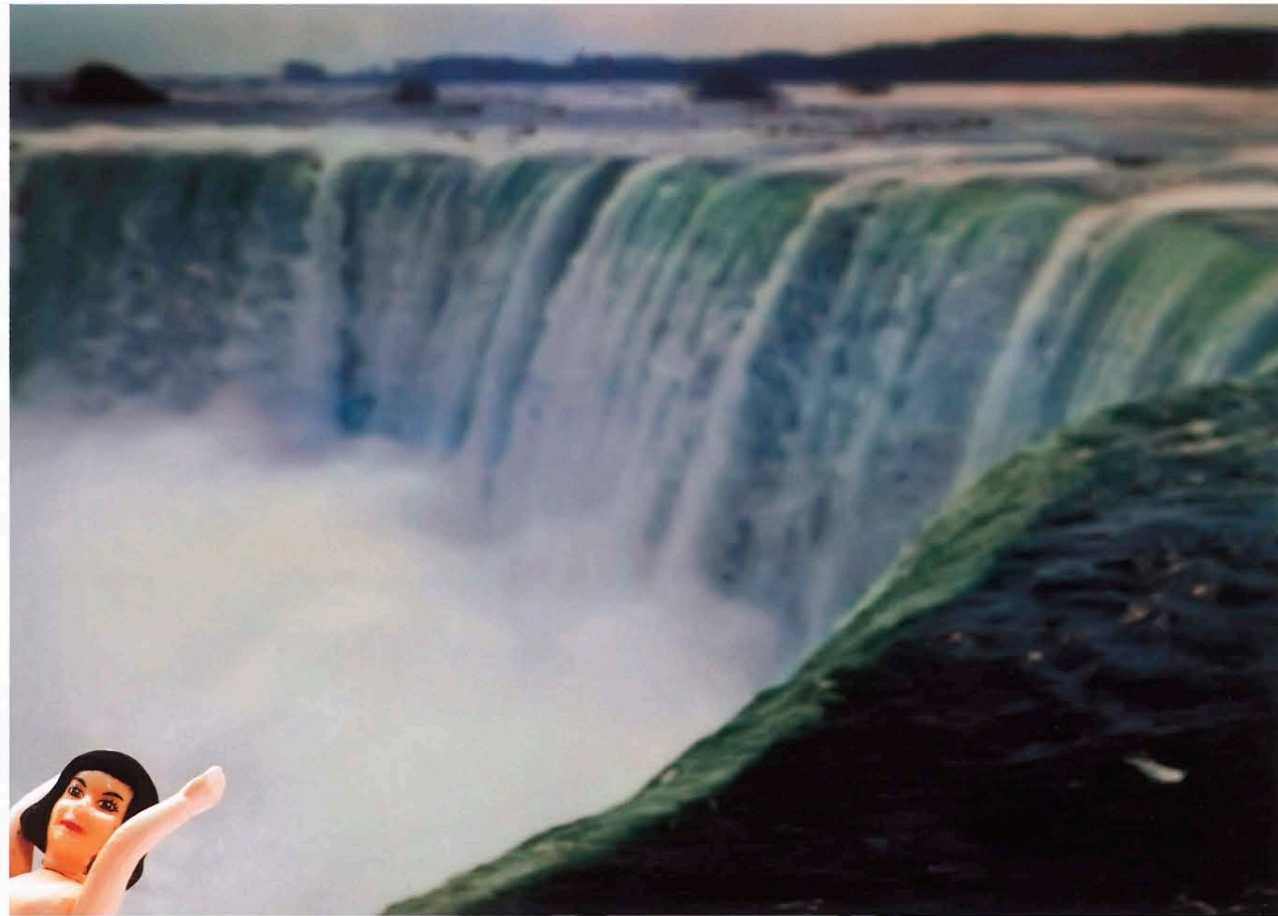
# 「Madame Cucumber」



Hello Cucumber, 2006



Ecstatic Instant No.2, 2005



Just lost, when I was saved!, 2006

## Portfolio Interview 2 伊賀 美和子 インタビュー

1999年度（第19回公募）優秀賞

インタビュー・構成=山内 宏泰

1999年に写真新世紀で優秀賞を受賞後、本格的に作家活動を展開してきた伊賀 美和子氏は、自身の「分身」か「相棒」とでもいうべき人形を被写体にした作品を生み出し続けてきた。現代アート界からも大きな注目を浴びる作家の、受賞当時の心境と現在の活動とは？

の影響を受けているんですかということ。でも、私がシリーズを始めたときには、私自身はシモンズ存在は聞いたことがありませんでした。知っていたら、無理に差異を出そうとしたりして制約ができてしまうので、知らずに出てむしろ良かったと思います。他に直接、誰かに感化されたということはありません。

つ問題が生じてしまった。同じ人形をずっと使っているんで、彼女をよく見ると目の部分の色が剥がれていたり、顔に小さい傷がついていたりする。大きいカメラで精密な描写をしてしまうと、写り過ぎてそれらが目立ってしまいます。つまり私が撮りたいものとはちょっと違ってきてしまうんです。それで、もっと人形をツルンとした感じで撮るためにデジタルカメラを使い始めました。今はデジタルで撮ったり、微妙な色合いが欲しいときには35ミリのネガで撮ったり、いろいろ使い分けています。

### お人形遊びから独自のミニチュア・ワールドへ

—受賞作は、人形が水に溺れる様子を撮っていてインパクト抜群でしたが、このアイデアはどこから？

「マダム・キューカンパ」と名付けたこの人形は、もともと海外で買った娘のおもちゃでした。作品は大きく引き伸ばしていますが、じつは彼女、小指ほどの大きさしかありません。ある休みの日に、自宅でふざけながらこの人形で遊んでいて、水槽の中で溺れさせたりしていました。その姿が不思議と面白くて、写真に残しておこうとしたのがはじまりです。

世の中にある「にせもの」は全般的に好きですね。喫茶店の店先のショーウィンドウに飾ってあるパフェの作りものなどには、妙に惹かれてしまいます。ただし、どんなにせものでも気に入るかといえば、そうでもない。ミニチュア集めが好きとしましたが、ベッドや机といった家具でも、本物みたいに木でできていたら、興味がなくなります。プラスチック製で、キッチンな色が塗ってあったりしてほしい。自分なりに、変なこだわりがあるんです（笑）。

—最新作は、2007年に東京とソウルで開催した個展の出品作。これは同年、写真集にもまとまりました。

—写真新世紀に応募しようと思ったのはなぜでしょう？

アートにはずっと関心があって、表現を見てもらえる機会をいつも探していたので。どうしても写真で表現しようと考えていたわけではありませんが、この時はたまたま写真という形だったので、写真新世紀に出してみました。

### 作品の主人公とともに冒険は続く

—受賞をきっかけに作家活動を？

そうですね。受賞して自信も得られたので、この人形のシリーズを続けようという方向性を決めました。その後、個展を開くようになるのですが、ギャラリーの方が写真新世紀の受賞作を知ってくださっていたのがうれしかったですね。私は今も、写真新世紀の卒業生だという意識を持っています。当時一緒に受賞した人達とはずっと連絡を取り合っていますし、私を優秀賞に選んでくださった南條 史生先生は、個展を開く度に見に来てくださいます。ほかの卒業生の方々もたくさん活躍されているので、励みになります。

—連作写真で表現する作品から、一枚で意味を持たせる作品を目指し、展覧会と作品集ではその1枚1枚がストーリーを紡いでいきました。人形の彼女はこれまでよりも外界に目を向けるようになって、ナイアガラの滝にまで行ったりします。でも最後に、彼女はいつも演じ続けてきた自分に気づいてしまい、ふと我に返って立ち止まる姿で終わります。

—今後はいったいどうなってしまうのでしょうか。それは今のところ、私にもわかりません。また何か私のなかに情景が浮かんでくれば、そこから新しい作品が始まっていくのだろうと思います。

—背景などはすべて手作りですか？

ミニチュアは作品づくりのためというより、もともと好きで集めていますから、家にたくさんあります。小物からインスピレーションを受けることもありますし、また足りないものは手作りしています。受賞作で使った便器なんかは、自分で樹脂を使って作ったものです。水に見立てた部分はゼリーでできています。こんな小さな世界ばかり撮っているので、使用するのはマクロレンズばかり。カメラは三台持っていますが、普通のレンズは一つもないんですよ。作品を撮るときには、フレームの中に写ったものだけが真実だと思っているので、その中で世界が完成されていればそれで良い。だから、自分の表現したい世界を出現させるためにはどこまでも手を加えるし、どんな方法だって考えます。まあ、好きなことだからそこまでやれるんですけどね。

—展覧会を重ねても、登場人物や作風は一貫していますね。

そうですね。この人形とは長い付き合いになってきました。でも、まだまだ私にとって気になる存在で、彼女を使ってやりたいことはたくさんあります。しかも、何だかだんだん自分に似てきたところもあるんです。人からそう言われることもあります。だからなおさら気になってしまう。このシリーズは、ライフワークとしてずっと続けていくつもりです。そのうち、人形の顔にしわを描いて撮影したりするようになるかもしれません。



### Profile

伊賀 美和子 (いが・みわこ)  
1966年 東京都生まれ  
1999年 写真新世紀(第19回公募) 優秀賞受賞  
2000年 個展「A STORM IN THE LIFE —台風一家—」セゾンアートプログラムギャラリー(東京)  
2003年 個展「テンペスト・イン・ティーポット」小出由紀子事務所(東京)  
2007年 作品集「Madame Cucumber」grambooks刊  
個展「Madame Cucumber」ベイスギャラリー(東京)、イヒョン・ソウル・ギャラリー(ソウル)

—独特の作風は、誰かの影響があったわけではないのですか。

よく言われるのは、ローリー・シモンズ(人形などを使って幻想的な世界を撮る米国の写真家)

ただ、同じ人形を撮っていても、使用する機材は変化しています。最初は35ミリのネガフィルムで撮影していました。そのうち、個展などで写真を大きく引き伸ばしたいと思うようになったので、画面のクオリティが気になり始めて、一時期は中判カメラを使いました。でも、そうすると一



Offering, 2006

「ID400」

1998



「MASQUERADE」

2006



# 「School Days」

2004



School Days / A, 2004



School Days / E, 2004

## Portfolio Interview 3 澤田 知子 インタビュー

2000年度特別賞

インタビュー・文=富田 秋子

自身が変装して写る自動証明写真400枚で構成した「ID400」で2000年度写真新世紀の特別賞を受賞し、2004年にはそれまでの写真的活動が評価され木村伊兵衛写真賞を受賞した澤田 知子氏。以後も、ホステス紹介写真を引用した「MASQUERADE」や、女子高のクラス写真で全員に変装した「School Days」など、独自のセルフポートレートによる作品づくりをおこなってきた。彼女の制作意図とはどんなものなのだろう？

### 変わらないテーマは「外見と内面の関係」

—デビュー作の「ID400」はどのようにして作り始めたのですか？

美術の短大を卒業してから、もっと写真を専門的に勉強しようと四年制の三年生に編入したんです。環境が変わって写真の授業も急に増えたので、最初の半年間はとにかくめまぐるしい生活だったんですけど、その間、本当に自分がやりたいことは何なのかをずっと自問し続けていたんです。以前から気になっていたセルフポートレートがやはり自分に合っているはずだ、という気持ちになったのは、夏休みが明けた10月くらいでした。

そんなある日、学校から帰る途中、急に「ID400」のイメージが目の前に広がって見えたんです。自分では、芸術の神様が降りてきた、って言っているんですけど（笑）。

証明写真は人を証明するためのもののはずなのに、その本人が変装していたら写真がいくらたくさんあっても一枚も証明にならない。でもその変装を一人の人間がやることで、人間の「外見と内面の関係」を示すことができるんじゃないかと思った。自分がやりたかったことはこれなんだと確信しました。その考えが浮かんでから、その週末にはもう撮りに行ってましたね。

—同じ自動証明写真機に何度も通ったのですか？

一人の人間がいろいろな他人に見えるということがポイントだったので、色の情報に邪魔されずに顔に目がいくよう、モノクロの証明写真機じゃないとダメだったんです。それに、一回の撮影で同じ4枚の写真が出てくるタイプで、しかも写真の表面もザラザラしているものがよかったです。

その条件にあった証明写真機が立体駐車場の中であって、その前にトイレがあったので、そこで着替えたり化粧して変装しました。見張り役の友達の人が来ないのを確認して合図をくれるので、

そこから写真機に走り込んで撮影するんです。

—そんな隠れた苦労があったんですね。

一日中撮っていると現像液が古くなって写真の色も悪くなっていくので、サービスセンターに電話をして替えてもらったり、写真が詰まって出てこなかった時は、メンテナンスの人が来る時間にあわせて取りに行ったんですけど、出てきた写真が私と全然違う顔なんで、訝しげに渡されたり（笑）。ハプニングはたくさんありましたが、楽しかったですよ。

—「外見と内面の関係」について、もう少し詳しく説明していただけますか？

もともとファッションが好きだったんですけど、着る服を変えると周り人の反応も変化することがずっと気になっていました。自分が自分であることは変わらないのに、どうしてなんだろう？と。でも、自分も人を外見で判断しているところもあるし、着る服によって自身の気持ちが変わる人もいます。自分も他人も含めて、外側の外見と、その人がその人であることとの関係性がどのように成り立っているのかということがとてもひっかかるし、考えさせられるんです。この疑問に対する正しい答えは出ないのかもしれないけれど、自分が考えていることをその都度提示して、それを見る人が自由に受け止めてくれたらいいなと思っています。

—この「ID400」で、2000年度写真新世紀の特別賞を受賞されたわけですが、受賞したことで変わったことはありましたか？

周りの評価も変わるし、自分では良いスタートを切れたという安心感がありましたね。また、受賞をきっかけにグループ展のお誘いをいただきましたし、そこから個展のお話に発展することもありました。

### 大事なものは質と量とスピードを保つこと

—コンスタントに新作を発表されてきていますね。

学生時代に教わったことの中で、私が特に気を付けようと思ったことは、声がかかったときに出す作品がないということは絶対にないようにしようということなんです。だから、最初の頃は意識的に年に一作品は新作を作るようにしていました。そんな中でだんだん展覧会の予定も入ってくるようになりました。

—そうやって意識的に続けてこられたことが、

写真新世紀や木村伊兵衛写真賞の受賞にもつながってきていますよね。

受賞することが目的で制作してきているわけではないんですけど、自分が作りたいものを制作してきた中で、写真新世紀で受賞して、それから4作目の展覧会で木村伊兵衛写真賞を受賞できたことは、本当にラッキーでした。

—木村伊兵衛写真賞を受賞して変わったことは？

自分の作品が写真や美術に興味がない一般の人の目にも触れる機会が増えたので、それは嬉しかったですね。

—木村伊兵衛写真賞受賞とほとんど同時に、ニューヨークにあるICP（国際写真センター）で新人賞を受賞されていますね？

もともと国内より海外のほうが展覧会をやる機会が多かったんですが、2003年の夏にニューヨークで個展を開催することになって、その展覧会レビューがあちこちのメディアに掲載されたんです。それから、あれよあれよという間に受賞ということになったんです。

—現在では、母校の大学で教壇にも立たれていますが、学生に学び取ってもらいたいことは？

一回一回の展覧会を自分で納得して積み重ねていくことで本当のキャリアもできてくるし、自分の自信にもなるので、チャンスを無駄にしないようにして欲しい。その為には、ある程度のスピードと質と量は大事です。私も学生時代に、考えながら手も動かして質の高いものをスピードを落とさずに作りなさいとずっと言われていたし、そう教えてもらったことがとても良かったと思っています。



### Profile

澤田 知子 (さわだ・ともこ)

1977年 兵庫県神戸市生まれ

2000年 写真新世紀特別賞受賞

2004年 木村伊兵衛写真賞受賞

The Twentieth Annual ICP Infinity Award for Young Photographer受賞



# 写真新世紀ニュース

過去の受賞者の方、今年度ゲスト審査員の方など、写真新世紀関連作家の注目情報をお届けします。

## 梅 佳代氏と本城 直季氏が第32回木村伊兵衛写真賞を受賞!



第32回木村伊兵衛写真賞を受賞した本城 直季氏 (左) と梅 佳代氏 (右)



賞状を授与される梅 佳代氏



賞状に続いて賞牌を授与される本城 直季氏



審査員挨拶にて対象作品の受賞理由について語る藤原 新也氏 (写真家)



壇上で祝辞を述べる審査員の藤山 紀信氏 (写真家)。この後、同じく壇上に座る梅 佳代氏が藤山氏にすかさずカメラを向ける一幕も



授賞式後のレセプションパーティには各界から多くの関係者が駆けつけた

2000年度 (第21回公募) および2001年度 (第23回公募) に佳作を受賞した梅 佳代氏は写真集『うめめ』(2006年 リトルモア刊) で、また2004年度 (第27回公募) に佳作を受賞した本城 直季氏は写真集『small planet』(2006年 リトルモア刊) で、第32回 (2006年度) 木村伊兵衛写真賞 (朝日新聞社主催) を受賞しました。

4月23日 (月) には東京・丸の内内の東京會館で授賞式が開催され、それぞれに賞状と賞牌、賞金50万円が贈呈され、受賞者あいさつで梅 佳代氏は「こんな素晴らしい賞をいただきありがとうございます。これまで写真を続けてきた中で、色々な人に親切にしてもらいました。本当にありがとうございました」と喜びの言葉を述べ、また本城 直季氏は「これが本当の自分のスタートだと思っています。これからも頑張りますので、よろしく願います」と今後への抱負を語りました。

同賞は、写真の制作、発表活動において、優れた成果をあげた新人に授与されるもので、写真界では最も権威のある賞として、写真界の芥川賞とも称されています。このような栄誉ある賞を受賞されたお二人の更なるご活躍を期待しております。

### 第32回木村伊兵衛写真賞対象作品



梅 佳代写真集  
『うめめ』  
定価：1,890円 (税込)  
リトルモア刊

どこにでもありそうな、しかし私達が見逃している日常の中のおかしな一瞬をとらえた梅 佳代氏の写真集。



本城 直季写真集  
『small planet』  
定価：2,625円 (税込)  
リトルモア刊

実際の景色を俯瞰することで、模型のように不思議な風景写真に写し取った本城 直季氏の写真集。

## 具 本昌氏の写真集2冊が発刊

2007年度ゲスト審査員を務めた韓国を代表する写真家・具 本昌氏の写真集2冊が発刊されました。



『白磁』  
定価3,990円 (税込) ラトルズ刊

世界中へと散らばった李朝の白磁を、メトロポリタン博物館 (ニューヨーク) や大英博物館 (ロンドン) など十数余の美術館を訪れ、数年の歳月をかけて撮影したという具氏。本書には、人と対話するかのようには被写体と心を通わせながら撮影する具氏ならではの静謐な写真の数々が収められています。

お問い合わせ：株式会社ラトルズ TEL：03-3511-2785 URL：http://www.rutles.net



『くらしの宝石』  
定価：1,575円 (税込) ラトルズ刊

くらしの中の古びた石鹸は、宝石のように美しい。そう気づいた具氏は数十枚のフィルムに撮影し、この一冊の写真集となりました。声なき者の声を聞く。そんな気持ちで写真を撮っていると語る具氏の写真は、美しいものこそ身近なところに転がっている、ということを見る者に教えてくれているかのようです。

## 内原 恭彦写真集『Son of a BIT』

3,990円 (税込) 青幻舎刊

2003年度 (第26回公募) グランプリを受賞した内原 恭彦氏は、東京を始めとする諸国の首都圏で、デジタルカメラにより毎日数百枚の写真を撮り続け、自身のホームページ「Son of a BIT」で連日発表してきました。その膨大な写真が初めてまとめられたのが本書です。森山 大道氏がその才能を「圧倒的」と高く評価する実力派の、緊張感ある作品の数々はまさに必見です。



お問い合わせ：株式会社青幻舎 TEL：075-252-6766  
URL：http://www.seigensha.com/

## 野口 里佳写真展「マラブ・太陽」開催中

会場：ギャラリー小柳 (東京都中央区銀座 1-7-5 8階)  
会期：2007年11月30日 (金) まで  
TEL：03-3561-1896  
開館時間：11:00~19:00 休館日：日・月・祝日  
入場料：無料  
URL：http://www.gallerykoyanagi.com/



野口 里佳、マラブ #3、2005、c-print、Courtesy of the artist and Gallery Koyanagi

1996年度グランプリを受賞し、2004年よりベルリンを拠点に活躍する野口 里佳氏の3年ぶりの個展が開催中。本展にはピンホールカメラで制作した新作「マラブ」シリーズと、2005年から2006年にかけて制作した「太陽」シリーズを出展。人の存在やその在り方、そしてそれを取り巻く未知の世界を主題に作品を制作してきた野口氏の新作をお見逃しなく!

## 「日本の新進作家VOL.6:スティル/アライヴ」展

会場：東京都写真美術館・2階展示室  
会期：2007年12月22日 (土)~2008年2月17日 (日) 47日間  
開館時間：10:00-18:00 [木・金は20:00まで] / 入館は閉館の30分前まで  
休館日：毎週月曜日 [ただし月曜日が祝日または振替休日の場合、翌火曜日が休館 / 年末年始は12月29日~1月1日まで休館、1月2日から開館]  
観覧料：一般700円 / 学生600円 / 中高生・65歳以上500円



◎ 大橋 仁

日本の新進作家を紹介する東京都写真美術館の展覧会シリーズ第6回にあたる本展は、「現代人の生と時間、その表現」をテーマに写真・映像を表現手段とする30代のアーティスト4人に焦点を当てています。このグループ展に、1993年度 (第8回公募) 優秀賞の大橋 仁氏が新作を出展。生や死をストレートに捉えてきた大橋氏がどんな作品世界を見せてくれるのか必見です!

## 「写真新世紀 巡回展2008」

2007年度の受賞作品および2006年グランプリ受賞者 高木こずえ氏の新作個展「laboratory1:」は、2008年前半に日本各地を巡回します。詳細については2008年を待ってから、キヤノン社会・文化支援活動ホームページ (canon.jp/scsa) にて発表します。どうぞお楽しみに!

# 写真新世紀

## 2007年度（第30回公募）概要

応募申込受付期間：2007年4月16日～6月11日  
作品受付期間：2007年4月16日～6月18日  
応募者数：1,277人

### 【優秀賞受賞者】

青山 裕企、黒澤 めぐみ、詫間のり子、田福 敏史、中里 伸也、中島 大輔

### 【佳作受賞者】

安達 英莉、伊藤 正博、魚本 勝之、エグチ マサル、大滝 功一朗、岡部 桃、  
鍵岡 龍介、金田 なお子、栗山 昌之、坂本 陽、佐藤 裕之、助田 徹臣、武田 陽介、  
谷 直恵、田村 俊介、中田 征志、西澤 諭志、比良間 さゆり、藤田 愛子、藤田 常人、  
松本 英明、南口 健一、武壮 隆志、山口 理一、梁 丞佑、吉谷 慶太、Amel Javier

### 【レギュラー審査員】

荒木 経惟（写真家）、飯沢 耕太郎（写真評論家）、南條 史生（森美術館館長）、  
森山 大道（写真家）

### 【ゲスト審査員】

榎本 了彦（アートディレクター）、具 本昌（写真家）

（人名は全て五十音順、敬称略）

写真新世紀誌第22号

発行責任者：キヤノン株式会社 コーポレートコミュニケーションセンター  
所長 平澤 哲男

制作協力：富田 秋子、山内 宏泰

本誌掲載の写真・記事の無断複製・転載を禁じます。

© 2007 Canon Inc. All right reserved.

非売品

# Canon

make it possible with canon

キヤノン株式会社 コーポレートコミュニケーションセンター 文化支援推進室  
〒146-8501 東京都大田区下丸子 3-30-2  
TEL : 03-5482-3904 FAX : 03-5482-9623 ホームページ : [canon.jp/scsa](http://canon.jp/scsa)



PUB. NCP04 1107T10 Printed in Japan

# 2007年度写真新世紀(第30回公募)のグランプリ該当者はなし 黒澤 めぐみ氏、詫間 のり子氏、中島 大輔氏の3名に 準グランプリを授与

2007年度(第30回公募)のグランプリ選出公開審査会が11月9日(金)に東京都写真美術館1階ホールで開催された。厳正なる審査会議の結果、本年度はグランプリの該当者はなしとなり、黒澤 めぐみ氏、詫間 のり子氏、中島 大輔氏の3名に準グランプリが授与された。グランプリ決定会議でグランプリ該当者なしという苦渋の選択がなされたのは、どの候補者も魅力的な個性は備えているものの、写真表現の新たな可能性を追求する写真新世紀のグランプリとするには決め手に欠けるとのこと、またそこで該当者なしとすることが、写真新世紀のみならず、写真表現の未来をより力強く切り開いていくための最良の決断であると、審査員全員の意見として確認されたからだ。

しかし、準グランプリ受賞作は素晴らしい作品ばかりだった。女性の心を持ちながら男性に生まれた一人の人物を追いかけた黒澤 めぐみ氏の「二重性活」に対し、審査員の荒木 経惟氏は、「被写体に写真あり! 写真から撮影者の気配は全く感じられなくて、被写体ばかりが目飛び込んでくるところが良い。写真行為を通してどれだけ被写体が写真を越えられるのか、それが写真(で大切なこと)なんです」と絶賛。また、高速バスの旅をモノクロ写真に撮影した詫間のり子氏の「まばたき」に関して、森山 大道氏は、「現実の断片を切り取った切れっ端の面白さがある。それが写真の本質なんじゃないかと思えますね」と、写真ならではの表現に成功した点を評価した。また、友人や身辺の情景を被写体に、自分が見たい画を設定して撮影したという中島 大輔氏の「喪失メトロノーム」に対し、飯沢 耕太郎氏は、「スタイルがあって、それに対する確信を感じます。写真がごちゃごちゃせずすっきりしていて、現実の世界からうまくカットアウトして出している。もっといろんな人たちを巻き込む世界になっていけば良いと思えますね」と今後への期待を語った。

表彰式で準グランプリの表彰状と奨励金の目録を受け取った後、黒澤 めぐみ氏は、「予想はしてなかったけど、すごく嬉しいです」と喜びの感想を述べ、詫間のり子氏は、「今後もがんばっていきますので、よろしくお願いします」とこれからの決意を、また中島 大輔氏は、「これを糧にどんどん写真を撮って、悪いことをいっばいしたいと思います」と準グランプリ受賞の思いをそれぞれ語った。



準グランプリを受賞した中島 大輔氏、詫間 のり子氏、黒澤 めぐみ氏



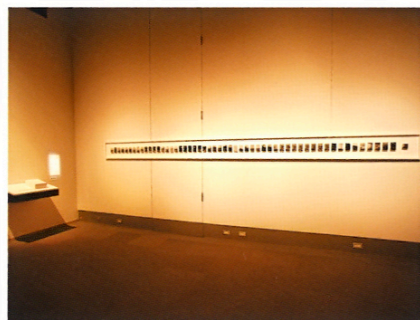
キヤノン株式会社コーポレートコミュニケーションセンター所長の平澤 哲男より表彰状を授与される黒澤 めぐみ氏(上・左)、詫間のり子氏(上・右)、中島 大輔氏(下)



## 準グランプリ受賞作品



黒澤 めぐみ氏「二重性活」



詫間 のり子氏「まばたき」



中島 大輔氏「喪失メトロノーム」

# 2007年度写真新世紀(第30回公募) グランプリ選出公開審査会報告

2007年度の受賞作品を展示する写真新世紀東京展2007が11月3日(文化の日)にスタートし、11月9日(金)に、2007年度(第30回公募)グランプリ選出公開審査会が東京都写真美術館1階ホールで開催された。

## 個性溢れる各候補者のプレゼンテーション

グランプリ候補者は、優秀賞を受賞した青山 裕企氏、黒澤 めぐみ氏、詫間 のり子氏、田福 敏史氏、中里 伸也氏、中島 大輔氏の6名。審査員は、レギュラー審査員の荒木 経惟氏、飯沢 耕太郎氏、南條 史生氏、森山 大道氏と、ゲスト審査員の榎本 了吉氏、具本昌氏の6名全員が出席された。

最初に壇上に立った青山 裕企氏は、作品「UNDERCOVER」は思春期に抱いていた異性に対する複雑な思いや欲望が発想の源になっていること、またモチーフにした女子高校生を記号化して見せるために行った撮影や展示における工夫などを、理路整然とした語り口で説明した。次にプレゼンテーションを行った黒澤 めぐみ氏は、女性の心を持ちながら男性に生まれた「奈々子さん」との出会いによって、作品「二重性活」の制作が始まったことや、二人の絆を深めながら撮影を進めていった経緯など、作品に対する写真家としての熱い思いを語った。続いて登場した詫間 のり子氏は、モノクロの縦位置写真で構成された「まばたき」が東京-京都間を走る高速バスの席上から撮影されたものであることやインスタレーションの意図などを説明し、「自分が見たもののみを信じ、それをカメラで撮っていききたい」という作家としての姿勢をアピールした。

スピーチとともに映写されるスライドを独自の方法で活用したのが田福 敏史氏。作品「さよならリアル・ワールド」が日常で撮影したスナップ写真であることや、主にデジタルカメラで撮影したものであることを説明した後、写真や制作に対する考え方を語る際にはスライドに「日常と旅(非日常)」や「写真しかない」といった言葉を大きく映すという方法でプレゼンテーションを行った。また、中里 伸也氏は20世紀初頭のフランス人写真家ウジェーヌ・アジェの記録写真からインスパイアされ、街の模型から制作した作品「Conversations with Stillness」について、写真に写る手仕事による歪みや色むらなどを感じ取って欲しいとアピールポイントを訴えた。最後にプレゼンテーションを行ったのは中島 大輔氏。作品に「喪失メトロノーム」と名付けた理由を説明するため、メトロノーム2台を用意して別々のリズムを刻ませるパフォーマンスを行い、撮影者である自分と被写体とのズレを認めた上で、次に見たい瞬間を作り上げながら撮影するという作家としての考え方や写真のスタイルについて説明を行った。



青山 裕企氏



黒澤 めぐみ氏



詫間 のり子氏



田福 敏史氏



中里 伸也氏



グランプリ選出公開審査会会場風景

# 写真新世紀東京展2007を開催!

## 白熱したグランプリ決定会議で下された結論とは?

各候補者によるプレゼンテーションが終了した後、審査員によるグランプリ決定会議が別室にて行われた。そこでは、候補者たちの作家としての個性や作品の魅力についてのみならず、今後の社会で受け入れられていくだけの力や作家としての姿勢があるかどうか、また候補者のみならず、写真新世紀への応募者たちの現在の傾向に関しても意見が交わされた。ここで問題となったのが、写真表現の新たな可能性を追求する写真新世紀のコンセプトに合致するグランプリとは、どうあるべきなのかということだった。そして、審査員共通の意見として、どの候補者も魅力的な個性を備えてはいるものの、グランプリとしての決め手には欠けるのではないかということだった。そんな白熱した議論の結果、本年度はグランプリの該当者をなしとするという苦渋の決断がなされ、一方、最後までグランプリの候補として議論の対象となった黒澤 めぐみ氏、詫間 のり子氏、中島 大輔氏の3名には準グランプリを授与するという結論が導き出された。

表彰式では、キヤノン株式会社コーポレートコミュニケーションセンター所長の平澤 哲男が「今回は残念ながらグランプリが選出されない結果となりましたが、多くの可能性を秘めた方々をご応募くださいました。来年は写真界に新風を吹き込むような作品が出てくることを大いに期待いたします」と挨拶を述べた。その後、佳作受賞者27名を代表して安達 英莉氏に表彰状が授与され、優秀賞受賞者3名には各々に表彰状と奨励金の目録が授与された後、今年、写真新世紀の公募が第30回目を迎えた記念の副賞として、キヤノンコンパクトデジタルカメラPowerShot G9が贈られた。続いて、準グランプリの3名には表彰状と奨励金の目録が授与され、同じく副賞としてキヤノンデジタル一眼レフカメラEOS 40Dのレンズキットが贈られることが発表された。

## この結果を糧として進むべき未来

表彰式後の審査員講演で飯沢氏は、「今回はすごく難しい審査でした。グランプリは日本の写真の世界を変えていけるだけの力を持っていないとちゃいけないけど、準グランプリの3名はまだそこまでの力がなかった。つらい結果だけど、今回の結果を今後の糧としていただきたい。来年は、審査員が全員一致ですごいと思う作家が現れることを期待したい」とコメント。南條氏は、「審査会議では、写真新世紀とは何か?という点で議論が白熱した。この問題をみんなで共有して、未来に期待したい」と今後への期待を語り、また榎本氏からは、「なぜこのような結果になったのかということの意味を受け止めて欲しい。写真を変えるような人は出てくるだろうし、そうじゃなかったら写真新世紀の意味がない」、また森山氏からも、「あくまでも実験という精神を持って写真新世紀に応募してきて欲しい」と未来の応募者たちを激励する言葉が語られた。韓国で積極的に若者の育成にあたっている具氏からは、「歴史に名を残すことはとても大変なことですが、みなさんは非常に実力があるので、今後も切磋琢磨してがんばって欲しい」と受賞者すべてに励ましの言葉が贈られた。



中島 大輔氏



審査員の方々



表彰式後、受賞者と審査員が全員揃った記念写真

## 具 本昌氏と飯沢 耕太郎氏によるトークショー報告



トークショーを行った具 本昌氏(左)と飯沢 耕太郎氏(右)



トークショー会場風景

韓国写真界の第一線で活躍し、また次世代作家の育成にも尽力してきた具 本昌氏は、日本でも益々注目される写真家。その具氏と親交のある写真評論家・飯沢 耕太郎氏とのトークショーが、グランプリ選出公開審査会の前に、東京都写真美術館1階ホールで開催された。

具氏は、作家としての活動と韓国の写真をとりまく現状を、スライドを見せながら解説を行った後、今後の韓国の写真について、「韓国で写真が芸術としてみなされてから20年。これからは、韓国ならではの写真を撮っていくべきだと思います」と語り、また自身についても、「自分の作品をもっと整理していきたいし、また自分が学んだことを若手に伝え、展示・発表していく手助けをしたい」と今後の抱負を語った。

トークショー終了後には、具氏サイン入り写真集の抽選会が行われ、来場者の中から5名の方々にサイン入り写真集「白磁」が具氏より直接贈呈された。

写真新世紀東京展2007が、東京都写真美術館地下1階展示室を会場に11月3日から25日まで開催された。東京展には、2007年度(第30回公募)の応募者数1,277名の中から選出された優秀賞受賞者6名、佳作受賞者27名の作品と、前年度グランプリの高木 こそえ氏の新作「laboratory1:」が出展。優秀賞受賞者や高木氏は各々の作品の意図や魅力を最大限に伝えるために熟考を重ねた展示を展開し、またスペースが限られた佳作受賞者たちの展示もそれぞれの個性が伝わる充実した内容となっていた。

過去の実績が数多く活躍しているとあって、写真新世紀への注目度は益々上がっており、会期中の会場内はいつも大盛況。開催期間20日間で延べ11,095人の来場者があった。また、11月3日、4日、17日と3回にわたって行われた優秀賞受賞者、準グランプリ受賞者および高木 こそえ氏のトークショーにも多くの来場者が集まり、作品の理解を深める格好の機会となっていたようだ。



優秀賞 青山 裕企氏「UNDERCOVER」



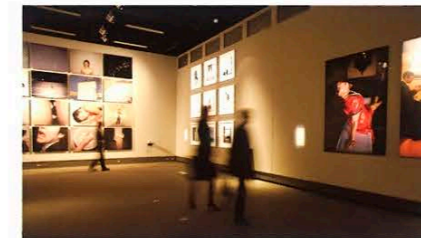
優秀賞 田福 敏史氏「さよならリアル・ワールド」



優秀賞 中里 伸也氏「Conversations with Stillness」



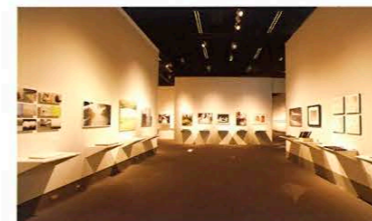
優秀賞作品展示コーナー



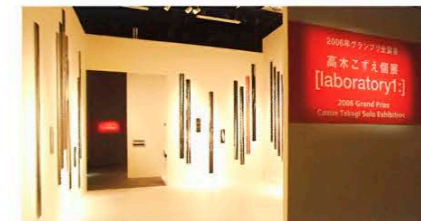
優秀賞作品展示コーナー



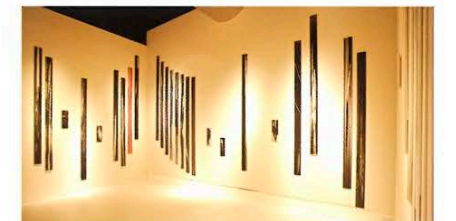
優秀賞作品展示コーナー



佳作作品展示コーナー



前年度グランプリ 高木 こそえ個展「laboratory1:」



前年度グランプリ 高木 こそえ個展「laboratory1:」

An English version of the contents of this supplementary report is available on the Canon Inc. website at the following URL: [canon.com/scsa](http://canon.com/scsa)

キヤノン株式会社 コーポレートコミュニケーションセンター 文化支援推進室  
〒146-8501 東京都大田区下丸子 3-30-2  
TEL: 03-5482-3904 FAX: 03-5482-9623 ホームページ: [canon.jp/scsa](http://canon.jp/scsa)



本誌は、VOC(揮発性有機化合物)が削減され、生分解性や脱色性に優れたインクを使用しています  
PUB. NCP05 1207T09 Printed in Japan